



全国曹洞宗青年会
創立50周年記念誌

全国曹洞宗青年会 創立 50 周年記念誌『LOG』
目次



祝辞

大本山永平寺 南澤道人不老閣猊下	02
大本山總持寺 石附周行紫雲臺猊下	03
曹洞宗宗務総長 服部秀世老師	04

御礼

第 25 期会長 田ノ口太悟	05
----------------	----

全曹青のあゆみ

活動【第 1 期・第 2 期・第 3 期】	06
活動【第 4 期・第 5 期】	07
創立期、第 1 回禅文化学林	08
懷葬禅師七百回大遠忌奉讃事業	10
創立期人物回想	11
創立 10 周年事業	12
会長寄稿【第 2 期・第 6 期】	14
会長寄稿【第 7 期・第 9 期】	15
会長寄稿【第 10 期・第 11 期】	16
活動【第 6 期・第 7 期】	17
活動【第 8 期・第 9 期】	18
活動【第 10 期・第 11 期】	19
第 1 回千僧法要	20
全国リレー托鉢・全国ソフトボール大会	22
創立 20 周年事業	23
阪神・淡路大震災復興支援活動	24
会長寄稿【第 12 期・第 13 期】	26
会長寄稿【第 14 期・第 15 期】	27
活動【第 12 期・第 13 期】	28
活動【第 14 期・第 15 期】	29
道元禅師七百五十回大遠忌報恩拝登「青年会の日」	30

創立 30 周年事業	32
会長寄稿【第 16 期・第 17 期】	34
会長寄稿【第 18 期・第 19 期】	35
活動【第 16 期・第 17 期】	36
活動【第 18 期・第 19 期】	37
活動【第 20 期】	38
電話相談事業	39
東日本大震災復興支援活動	40
創立 40 周年事業	42
会長寄稿【第 20 期・第 21 期】	44
会長寄稿【第 22 期・第 23 期】	45
会長寄稿【第 24 期・第 25 期】	46
活動【第 21 期】	47
活動【第 22 期】	48
活動【第 23 期】	49
活動【第 24 期】	50
精進料理 FESTA	51
映画『典座—TENZO—』	52
コロナ禍でのオンライン事業の発展	54
国際事業の 50 年	56

創立 50 周年記念事業

活動【第 25 期】	58
創立 50 周年記念キービジュアル	59
両大本山報恩拝登	60
禅のつどい「自然に親しむ ZENASOBI」	62
禅のつどい「RYUREI」・「穩坐」	63
災害復興支援活動全国研修会	64
記念式典・シンポジウム・記念講演	65
50 周年記念事業実行委員長 森井宗淳／編集後記	66

全国曹洞宗青年会 創立 50 周年記念誌『LOG』

令和 7 年 3 月 31 日初版発行

発行／全国曹洞宗青年会

制作／カラスブックス

印刷／創文社印刷株式会社

copyright©2025 by 全国曹洞宗青年会

All rights reserved. Printed in Japan



大本山永平寺 貫首 南澤道人 不老閣猊下



全

国曹洞宗青年会創立50周年を祝し、衷心よりお慶びを申し上げます。

創立から半世紀間、歴代会長を中心として会の運営に当たられた役員諸師、全曹青執行部の意を体して実動された全国の曹洞宗青年会会員諸宗師、そして皆さんの漲る情熱と弛まぬ努力に感応道交し、これを支えんと物心両面よりご支援くださった全国宗門寺院様、すべての力が和合し一つになってこそ迎えられた創立50周年であると存じます。

全国曹洞宗青年会は両大本山貫首を名誉総裁とし、宗務総長を名誉会長とする全宗門的組織であります。現在大本山總持寺様の猊座にあられる石附紫雲臺猊下その方が全曹青の第2代会長でもありました。全曹青発足の目的は会則第3条に、『古教照心の示訓を旨に自己の研鑽に努め、互いに乳水和合し、自由で創造的な活動を通じ、心豊かな社会の形成を目的とする』と、あります。つまり、先ずは自己研鑽に努めるのです。そして、自己研鑽に余念無き宗侶が乳水和合して弘法利生に精励すること

とを目的としているのです。このことから、全曹青は叢林を巣立った若き宗侶の次なる僧伽さんかともいえます。僧伽でありますから、自己研鑽を怠ること無く智慧を育み、智慧に裏付けられた衆生済度の慈悲行を履踐して行くのです。釈尊こそが、智慧と慈悲に拠って衆生済度を実現されたお手本であります。

現代社会は行き詰まっております。会則に謳われた「心豊かな社会の形成」は、今まさに地球規模の願いとなっております。釈尊のみ教えを正伝し、一仏両祖をいただく私伝こそが、偏りの無い智慧と、深い慈悲を以て心豊かな社会を形成すべく、世を善導して行かなければならないのです。

高き志を掲げる全曹青であります。会員諸師の道心堅固を以て「百尺竿頭進一步」50周年の吉辰を超えて、更なる充実発展を目指しご精励されます事を念じ、祝辞と致します。

大本山總持寺 貫首 石附周行 紫雲臺猊下



全

国曹洞宗青年会が創立50周年を迎えられ、記念誌『LOG』を出版されますことは、会の持続・継承に寄与することと心からお祝い申し上げます。

昭和40年代の、開かれた宗門での教化活動の先端は「緑蔭禪の集い」と「梅花流御詠歌」であったと思います。

特に「禪の集い」は若者が集い「坐禪」を主体として仏教講義やレクリエーションを日程に組み入れて、いままでの伝統教団にはなかった企画でありました。

会場は主としてお寺さんにお願ひし、寝食を共にしての合宿生活は若者や学生の方々に大変な好評となつて広がりを見せたのでありました。

静岡県や栃木県はその先進県で、他県からのリーダー養成を受けていただいた初期の活動もあり、やがて全国に広がりを見せ「緑蔭禪の集い運動」として、宗門の教化活動の広がりを持つてくださいました。

一方、教化活動が盛んになると主催者となる宗門青年会の組織拡充が必然として望まれ、名称も「仏教青年会（仏青）」から「曹洞宗青年会（曹青）」に統一されたように思います。

教化活動と合わせて自己研修も青年会活動の大きなテーマとなつてまいります。多様化する社会の変遷に対し、曹青活動の中で各都道府県単位においてそれぞれの研鑽が課題となつて活動が大きく広く展開されてきたように思います。

このような経緯を経て全国曹洞宗青年会の誕生に至るわけでありますが、発足に際しましては全国から刺激を求めている人材が集まり、宗務庁からの提案がきっかけとなり「全国曹洞宗青年会」が発足し、50年を迎えることとなつたわけです。

拙稿も発足当時に思いを馳せ、次への50年に大いに期待を申し上げ、祝辞に代えさせていただきます。

曹洞宗宗務総長 服部秀世 老師



全

国曹洞宗青年会が創立50周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。石附周行紫雲臺祝下のご臨席を仰ぎ、盛会裡に記念式典が円成いたしましたこと、誠に慶祝の至りに堪えません。

本会が『大衆教化の接点を求めて』を標榜し発足して以来、会員一丸となって様々な教化活動に取り組み、また、各所で惹起する自然災害への支援活動を展開してこられたことは、宗門のみならず、社会においても等しく知るところであります。特に、令和6年1月1日に発生した令和6年能登半島地震におきましては、早々に現地に赴いての炊き出しや支援物資の搬入等、様々な支援活動を展開されたことに對し、内局として深甚なる敬意と感謝の念を表するものであります。

このような活動は、宗教者の社会貢献として、特に被災地やマスコミにおいても高く評価を受けているところであり、宗教者が人々や社会の中に分け入って活動する菩薩行として、今日の時代の要請

に即応できるということ、大変重要な教化の形であることを示しております。

祖師方のお言葉の中に、「三世の諸仏は火焰裏に在って大法輪を転ず」という御教えがあります。火焰裏とは諸仏の説法道場の象徴であり、言うなれば、人々が悩み苦しむこの社会のことといえましょう。その真つ只中を説法の道場と捉え、そこで活動することが大法輪を転ずることに他ならないというお示しであります。

若く燃えるような志と行動力のある青年僧の諸兄におかれては、社会に存在する多様な問題に對し、大いに貢献できるものと期待するところであり、宗門として積極的に支援してまいりたいと考えております。

結びに、これまで全国曹洞宗青年会を支えてこられた関係各位を称揚し、本会のますますの発展と、会員諸兄の、より一層のご活躍を祈念申し上げ、祝辞といたします。

全国曹洞宗青年会 第25期会長 田ノ口太悟



平

素より全国曹洞宗青年会の活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。当会を代表し、ご挨拶を申し上げます。

昭和50年の秋に全曹青が創立し、『大衆教化の接点を求めて』をメインテーマに活動を展開して50年の年月が流れました。全曹青活動に取り組んでいて気付かされるのは「諸先輩方の想いと試行錯誤の末に我々現役会員は活動している」という事実です。50年という

歴史の中で、少しずつ「大衆教化」を目的にした事業が立ち上げられ、工夫を経ながら引き継がれております。活動に込められた諸先輩方の「想い」を、現役会員である我々は将来の青年会員へと伝えなくてはなりません。そのために「想いを結び合わせ、未来へ」放つべく、多彩な創立50周年記念事業を展開させていただきました。

全曹青活動を現在まで繋いでくださった諸先輩方への敬意、青年僧侶同士の交流、青年会活動

の将来への継承を大目的に行ってきた創立50周年事業ですが、多くの方々のご賛同とご支援がなければ成し得ませんでした。ご祝辞を賜りました大本山永平寺貫首南澤道人禪師、大本山總持寺貫首石附周行禪師には両大本山報恩拝登行事も含め格別なご高配を賜りました。篤く御礼を申し上げます。同じくご祝辞をいただきました曹洞宗宗務総長服部秀世老師に伏して御礼を申し上げます。

全曹青の活動は多くのご支援によって支えられております。加盟曹洞宗青年会の皆様、各管区曹洞宗青年会の皆様には共同して活動を推進していただきました。曹洞宗宗務庁様、曹洞宗婦人会様、その他宗門関係諸団体の皆様には常に温かいご支援をいただいております。龍象会をはじめとする全曹青の諸先輩の方々には記念誌の取材を含めお世話になりました。皆様への深い感謝をもちまして創立50周年を迎えての御礼とさせていただきます。

第1期

大衆教化の
接点を求めて

1975

- 発起人総会・結成総会開催
- 広報誌『曹青通信』創刊
- 第1回青年宗侶のための教養セミナー「仏教の人間学」



1976

- 会員500人突破
- 近畿地方集会・巡回教養セミナー「奈良の庶民信仰」(奈良)
- 東海地区集会・巡回教養セミナー「飛騨の円空仏」(岐阜)
- 韓国仏教文化交流使節団派遣(105人参加)
- 東北地方集会・巡回教養セミナー「たましいとの出会い」(岩手)
- 全国で管区青年会の発足が活発化
- 秋期禅のつどい中央研修会「宗教的集会の問題点」
- 伝道掲示板設置推進運動を展開

1977

- 関東地方集会・巡回教養セミナー「問われる宗教者—新しい教化論」(千葉)
- 新制全日本仏教青年会加盟
- 春期禅のつどい中央研修会「新しい禅のつどい運動の展開を目指して」
- 「オリエント茶会」(曹洞宗檀信徒会館)
- 九州地方集会・巡回教養セミナー「日本仏教意外史」(大分)



1978

- 禅のつどい中央研修会【西日本会場】「不安の構造と大安心へのプロセス」(大阪)
- インド仏跡参拝団派遣
- 禅のつどい中央研修会【東日本会場】「不安の構造と大安心へのプロセス」(宮城)
- 北海道地方集会・巡回教養セミナー「遊行者の仏教」(北海道)
- 「世界仏教徒青年会議」日本大会参加、WFBYへ加盟(東京グランドホテル)
- 第1回禅文化学林(大本山總持寺)
- 新会員証作成
- 「伝道句友の会」発足 伝道句集頒布

1979

- 中四国地方集会・巡回教養セミナー「真の教化者像を目指して」(広島)
- 国際仏教文化交流(タイ・インドネシア)
- 茶と禅のつどいPART2「オリエント茶会」(京都)
- 禅のつどい中央研修会「意義あるグループ研修のために」
- カンボジア難民支援開始(義援金・現地支援)

1980

- 禅のつどい中央結集・第2回禅文化学林(大本山永平寺)
- 春期禅のつどい中央研修会「仏教と同和問題」
- 全国一斉托鉢
- 全国写経運動
- 『布教の理論とアイデア集』頒布
- 交響曲カンタータ『只管打坐』制作
- 大本山永平寺青年結集大会 開催
- 天童寺落慶法要 報恩拝登
- 第3回禅文化学林「青年授戒会」(静岡)

1981

- 福井県に交通安全車寄贈

第2期

お寺を
コミュニティーの場に

第3期

拓かれた
寺院の姿を



【第1期】

会長・門脇元老 老師
宮城県／林香院

広報誌『曹青通信』創刊

モノクロタブロイド紙として創刊され、創刊号から有識者や老師方からの寄稿記事なども掲載された。青年会活動の報告や告知、未来を担う青年僧侶の在り方を追求する記事が目立った。

【第2期】

会長・石附周行 禪師
(現大本山總持寺紫雲臺下)
群馬県／雙林寺

オリエント茶会
椅子に座って気軽に抹茶を楽しむ、茶道の中にある禅を伝える事業。全曹青初となる布教教化事業として若い世代をターゲットに開催された。全2回の開催で約2000人以上来場し、大盛況の事業となった。

全曹青シンボルマーク

第2期では新会員証が作られ、現在も親しまれているシンボルマークが考案された。「燃え上がる青年のエネルギーを八正道の中に図案化し、それを法界定印でしっかりと支え合合しており、未来(上部)に向かって無限を指向する」という意味が込められている。

【第3期】

会長・佐藤泰惲 老師
愛知県／勝榮寺

カンボジア難民支援
全曹青初となるボランティア活動。支援金を募ることからスタートし、実際に現地に入つての支援も実施した。現地支援ではサケオ難民キャンプに物資や医薬品等を持参した。

Action 主な活動・事業

第4期

自らの行履を
求めて

前期禅のつどい中央研修会「青年授戒会ビデオ研修」1981

組織再編に着手(2年間継続)

『曹青六年のあゆみ』発行



『仏教の生活ハンドブック』発行

後期禅のつどい中央研修会「禅のつどいの運営とテーマの選び方」

第4回禅文化学林「青年授戒会」(神奈川)

前期禅のつどい中央研修会「坐禅による教育と信仰の深め方」

『授戒会差定』発行

『禅のつどい企画運営参考資料集』発行

『写経の教室』『写経のすすめ』発行

広報誌第25号記念号発行

「宗門を語る講座」開催



後期禅のつどい中央研修会「明日への提言」

続『曹青のあゆみ』発行(各県曹青の活動を紹介)

第5回禅文化学林「シルクロードと仏教文化」(大本山總持寺)

1983

前期禅のつどい中央研修会「子どもの食卓」

広報誌で「海外トピックス」掲載

『「禅」Tシャツ』頒布

全曹青推薦品の頒布窓口を開設



禅のつどい中央研修会【東日本会場】「食をみなおす」(福島)

禅のつどい中央研修会【西日本会場】「これでいいのか あなたの食生活」(京都)

禅のつどい中央研修会【中央会場】「お母さんと一緒に ちかいのつどい」(神奈川)

第6回禅文化学林「シルクロードに結ぶ仏教文化」(大本山永平寺)

前期禅のつどい中央研修会「食について」

創立10周年記念「洋上子供セミナー」

創立10周年記念「ほほえみの石仏展」(「微笑仏」展)開催

創立10周年記念式典開催

『緑蔭説法』発行

『檀信徒手帳』発行



禅のつどい中央研修会【西日本会場】「食を見直そう」(福岡)

禅のつどい中央研修会【東日本会場】「アフターケアとしてのカウンセリング」(神奈川)

第7回禅文化学林「天童山参拝と桂林の水墨画の世界めぐり」

1985



【4期】
会長・桑原大宗老師
新潟県／瑞光寺

『曹青のあゆみ』
結成から5年が経過し、これまでの全曹青の活動を振り返る書籍を発行した。加入者の増加を受け、翌年には各地方の曹青会の活動を紹介する続編も発行した。

組織再編
結成から5年の経過を経て、会員増加に伴う組織再編を進めた。また、個人会員から各県曹青会による団体加入が開始された。

各種書籍の発行
頒布物としての書籍を充実させた。一般向け布教教化を目的とした書籍『仏教の生活ハンドブック』や、青年僧侶向けに『禅のつどい企画運営参考資料集』等、多種多様な資料や書籍が編集発行された。

【5期】
会長・櫻井孝順老師
静岡県／栄林寺

禅のつどい中央研修会地方展開
創立より継続してきた中央研修会を、全国23ヶ所の事業として分散開催した。「食」をテーマとした講演を主軸に、多くの青年僧侶の参加を推進し、各開催地とも盛況な研修会となった。

檀信徒手帳の頒布
第4期に制作した『仏教の生活ハンドブック』から発展し、より曹洞宗檀信徒にフォーカスした頒布物を制作した。

創立期

大衆教化の接点を求めて 全国曹洞宗青年会創立への歩みが始まる



昭

昭和40年代後期、高度経済成長期が終わりを迎えた当時の社会では、「宗教の現代社会への役割」が見直されつつありました。複数世帯が同居する家族形態から核家族世帯の増加、都市部への人口の流入、急激な変化が生んだ様々な社会問題。まさに激動の時代と言わしめる日々の中で、人々の悩みの内容、宗教に求める役割も大きく変化していきました。

とりわけ当時の青年僧侶は、寺檀関係を中心に据えた在来仏教の「護持会的教団」という在り方について、「本当にこのままで良いのか」という問題意識を持っていました。この現状から脱却し、広く社会全般を布教教化の場とするため、全国の力が結集する青年会の創立を求める気運が高まっていきました。そんな時代背景の中、昭和50年に全曹青は創立への一歩を踏み出しました。

昭和50年5月6日、門脇允元老師、佐々木宏幹老師、皆川広義老師、萩野孝昌老師、有馬実成老師、畑一学老師、

石附周行禪師（現大本山總持寺紫雲臺猊下）、佐藤泰淳老師の諸師が一堂に会し、第1回全曹青設立準備委員会が開催されました。同年10月2日には曹洞宗檀信徒会館3階会議場において曹洞宗青年会発起人総会を開催、11月26日に同会場で曹洞宗青年会結成大会が開催されました。創立当初は個人加入であったため、全国から自らの意志で参集した500人を超える青年僧侶の熱気とともに、現在に続く全曹青の歩みが正式に始まりました。

全曹青の当初活動目的は、「会員一人一人が曹洞禅の本旨に目覚め相互の連携を深め、つねに、必要な社会的活動を通して、宗教心に根差した人間の育成を計り、以て健全な社会の形成に貢献すること」で、創立に際し『大衆教化の接点を求めて』という活動スローガンへと凝縮されました。やがてこのスローガンは全曹青のメインテーマとなり、創立半世紀を迎えた現在も活動の基盤であり大切な指針として受け継がれています。

第1回 禅文化学林

人生の意味としての仏教を伝える中核事業の始まり

第1回禅文化学林

日時／昭和53年11月20日～22日

会場／大本山總持寺

【主要カリキュラム】

・坐禅

・大茶盛式

・礼仏式

・駒澤女子短期大学教授 太田久紀氏 講義「私の仏教概論」

・大日本茶道学会会長 田中仙翁氏 講演「茶の味」

・群馬県吾妻高校講師 長徳寺副住職 酒井大岳老師 講演「書に見る人と禅」

・曹洞宗教化研修所講師 中野東禅老師 講座「禅寺入門」

・全曹青常任講師 有馬実成老師 講演「仏像とその心」

・第2期全曹青副会長 有延美明老師 講義「仏教と生活」

・全曹青北海道管区理事 丹羽安基老師 講義「禅と食生活」



第

2期において開催された第1回「禅文化学林」は、全曹青創立の機縁となった「禅のつどい」運動を基盤に企画されました。昭和30年頃から始まった「禅のつどい」運動は、青少年や一般の人々に宗教的情緒を味わってもらう正しく仏教を理解してもらうことを目的とし、曹洞宗青年教化連合会を中心に展開されていました。しかし、「第1回禅文化学林」が企画された昭和53年の時点ですでに運動は20年以上が過ぎ、さらなる発展を目指す声も多くありました。

この状況に因應するために「禅文化学林」は企画されました。単なる儀式・儀礼としての仏教ではなく、人生の意味づけとしての仏教を人々に伝える。そのため、禅の信仰と体系的学修による人格形成が行われることを大目標に掲げました。名前は「禅」という文化を参加者による集団（叢林）修道によって「養う」という考えに由来します。

「第1回禅文化学林」は大本山總持寺において11月20日から22日にかけて開催され、内容は坐禅・仏教概論（講義）・仏教文化講座・礼仏式・大茶盛式・記

念講演と極めて充実したものでした。2泊3日という期間の開催でしたが、潤沢な内容を未消化に終わらせないよう、円滑な運営がなされました。

興味深い取り組みとして、現在も真言律宗総本山・西大寺で行われている「大茶盛式」を組み込んだことが挙げられます。「大茶盛式」とは、叡尊上人が西大寺復興の際に当時高価な薬とされていたお茶を民衆に施したことに由来する行事です。人間の顔の倍ほどの大きさの茶碗に点てたお茶を、その場にいた全員で廻し吞みします。茶碗はあまりにも大きいため一人では飲むことができず、両脇の人に助けってもらう必要があります。助け合いながら同じ茶碗からお茶を飲むことで、「一味同心」の精神を育もうとする行事です。

地方や僧俗の垣根を越えて「一味同心」に参学する。この精神のもと、禅文化学林はこの後も受け継がれていきました。禅文化学林は各管区大会併催や全曹青主催として、活動の中核を担う事業として継続しています。

大本山永平寺二祖国師孤雲懷奘禪師七百回大遠忌奉讃事業 全国の青年僧侶が一体となって邁進

第

3期においては、大本山永平寺二祖国師孤雲懷奘禪師七百回大遠忌奉讃事業が行われました。その内容は、全国の青年僧侶による「托鉢」と「写経」の二大運動、そして黛敏郎氏の作曲による交響曲の演奏でした。

「全国一斉托鉢運動」は、『あなたがとう あなたの愛と真心を』をキャッチフレーズに全国の青年僧侶・青年会に呼びかける形で行われました。秋の大遠忌円成までの期間、とりわけ4月・5月を托鉢月間として、各青年会で3回ほど会員全員の参加による托鉢を行っていたり、青年会ごとの浄財目標、そして托鉢運動全体の浄財目標も定め、佐

藤第3期会長が先頭に立ち運動を推進しました。

一方、「写経運動」については、檀信徒の能動的な参加によって成り立つという側面を教化事業として重視し、本事業をきっかけに各地で定期的な写経会が定着することを目指しました。そのために、全曹青会員による写経会を積極的に開催し、写経運動全体の目標枚数とともに会員ごとの目標枚数も定めました。また青年僧侶が互いの写経会へ参加し、それを通じて写経会の運営の仕方、写経の仕方等を学び合うことを推奨しました。

運動によってお寄せいただいた写経は、昭和55年9月16日大本山永平寺において、「二祖国師大遠忌奉讃青年大会（全曹青永平寺結集）」の折に奉納しました。大会では「二祖国師大遠忌奉讃法要（納経法要）」が厳修され、不老閣下のご垂示を賜りました。午後には青年集会ののち報恩坐禅を勤め、後堂老師の提唱をいただきました。

これらの二大運動に加えて、特に力を入れたのが現代作曲家の黛

敏郎氏に依頼した交響曲の制作でした。交響曲カンタータ『只管打坐』は、佐藤第3期会長が積極的に旗を振り完成しました。初演は先述の「二祖国師大遠忌奉讃青年大会（全曹青永平寺結集）」の後、場所を福井市文化会館に移動して行いました。『只管打坐』は道元禪師の「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて冷しかりけり」という歌が主題となっていて、曲の最初と最後にもこの歌が歌い上げられます。歌と語りが交互に用いられ、まさにカンタータ（交声楽曲）というに相応しい音楽となりました。

大遠忌奉讃事業は、全曹青創立より初めて「全国の青年僧侶が一体となり、一大事業を邁進する」という目標のもとに行われた事業です。「托鉢」「写経運動」「交響曲制作」という多人数によってのみ成し得る内容を展開することで、多くの青年僧侶の参加を促しました。初期全曹青において、活動の性質を発展させる役割を果たした事業でした。

交響曲カンタータ『只管打坐』
作詞／藤田敏雄 作曲／黛敏郎
日時／昭和55年9月16日 福井市文化会館
演奏／東京交響楽団



【創立期人物回想】

寄稿／宮入宗乗老師（第3期副会長）

第1期会長・門脇允元（宮城）

全曹青立ち上げ準備からのメンバーである。強い信念と温厚な人柄で物事をまとめ、相互信頼の要となつて会を立ち上げ、初代会長となった。「優しい仏教、わかりやすい布教」を掲げ、坂村真民氏・ひろさちや氏などとも親交が深く、全国の宗門寺院とのパイプを創出した「さきがけ」である。

第1期副会長・藤井大吾（大阪）

端正な物腰と静かな語調で関西の宗門事情に精通し、会の設立に際し「広がり」の基を作った。

第2期会長・石附周行（群馬）

群馬県子持村（現洪川市）、大本山總持寺御直末・大雄山最乗寺輪番地である雙林寺住職として多忙なお立場であったが、その広く深い見識と大衆教化への熱い情熱を以て第2期の会長となり、全国から集まった「問題意識の塊」のようなメンバーを束ねて黎明期を作り上げられた。後に宗議会議員・布教師養成所主任講師・大雄山最乗寺専門僧堂堂頭（真如臺）等を歴任し、現在大本山總持寺の猊座にあり、2年ごとの曹洞宗管長とされている。

第2期副会長・有延美明（大分）

地域青年活動のリーダーの一人として遠く九州大分から毎回会議に参加さ

れていた。創立準備期からの重鎮であった。

第2期事務局長・松倉紘洋（群馬）

石附第2期会長と共に同じ群馬県から参集、創立準備委員からの参画である。とかく喧々囂々と議論しあい、「熱く」なる会議のまとめ役としてその人柄を活かし、また社会的活動の経験を活かして会運営の要を務めた名事務局長である。（この2期、小生は広報委員で会報『そうせい』の創刊・発刊に取り組んだ）

第3期会長・佐藤泰惇（愛知）

社交的で得意技は資金のやり繰り。事業を企画するたびに必要な資金の調達や、事業収益を算出しては当時まだ財政的な基盤の弱かった当会の会計を潤した。また尺八の名人でもあり（有馬実成師・宮入宗乗）と共に渡航したイラン・イラクでは、アラブの砂漠の真ん中で尺八の明調を奏で、現地の人々を釘付けにした。大型イベントの企画力にあふれ、また人脈も強く、会長自ら音楽家の團伊玖磨氏や様々な著名人を禅文化講座やイベントに招聘した。

第3期副会長・森田宏彦（千葉）

よく会長を補佐して、ブレイキ役や支え役に力を尽くしていた。

第3期副会長・宮入宗乗（長野）

設立準備委員会段階より長野県から個人会員として参加、設立以降は「総合企画委員・広報委員」を拝命し、会報の創刊・編集発行、各事業の企画運営の一員として末席を汚し、第2期から佐藤泰惇会長の推薦により執行部に加わった。副会長の2年目には私事（実父の死去・自営の未満児保育園の建設・開園など）の事情で、会議には上京したが事業実施の時には半分くらい参加できなかった苦い経験がある。

第3期事務局長・南敬爾（茨城）

茨城県日立市の天童山大雄院（最勝寺）住職で、傍ら寺院経営の近代化を目指す、全国の寺院のコンサルタント的な役割とメンテナンスの指導アドバイザー等を手掛ける会社を設立、新しい時代の新しい感覚の寺の在り様を開拓しておられた。その中から得たノウハウの数々を全曹青活動の中で提案してくれる存在があった。50代であったろうか、比較的若くして遷化された。

創立1～3期目のこの時期、ここでは名前が挙がってこないが、いわゆる三役（正副会長・事務局長）を支えた「理事・総合企画委員・事務局」同志がいる。忘れてはならない各師であるが多岐にわたるので詳細は割愛することをお詫びしたい。

全曹青創立10周年記念事業

「ほほえみの石仏展」・「洋上子供セミナー」

第5期において、全曹青発会以来のメインテーマである『大衆教化の接点を求めて』をさらに敷衍し、さらなる浸透を目的に、全曹青創立10周年記念事業が行われました。特に「この愛らしき野の仏たち・ほほえみの石仏展」と「洋上子供セミナー」が記念事業の中心となりました。

ほほえみの石仏展

昭

和59年10月12日から24日まで新宿の小田急百貨店で開催された「ほほえみの石仏展」は、主催に読売新聞社、後援に文化庁を迎え、企画を全曹青が担うという創立以来の大事業でした。

松倉紘洋10周年記念特別事業実行委員長は「この企画におきましては、全国の石仏が新宿という一点に各々のふる里の祈りを以て集われます。その意味において郷里と都市を結ぶ新しい一筋の糸を当企画展を中心に創り出そうではありませんか」と趣旨を語られています。「野仏さまを一堂に会する」と

言葉で記すと簡単ですが、重い石仏を全国各地から集めねばなりません。日本石仏協会会長の大護八郎氏の協力を得て、所有者・管理者との折衝を行い、松倉委員長が実際に現地に足を運んだことも多くありました。その結果、全国から150体を超える野仏さまをお迎えすることができました。

いよいよ開催されると、ひっきりなしに観覧者が訪れ、開催期間約2週間で入場者総数が約5万人、NHKをはじめとするテレビや新聞にも取り上げられ、想像を超える大盛況となりました。運営を手伝った全曹青会員は、近くの宿泊施設に交代で泊まり込み一丸となって創立以来の大事業を支えまし



た。また多くの方に告知するため、新宿のロータリークラブ等に直接広報のため訪問しました。

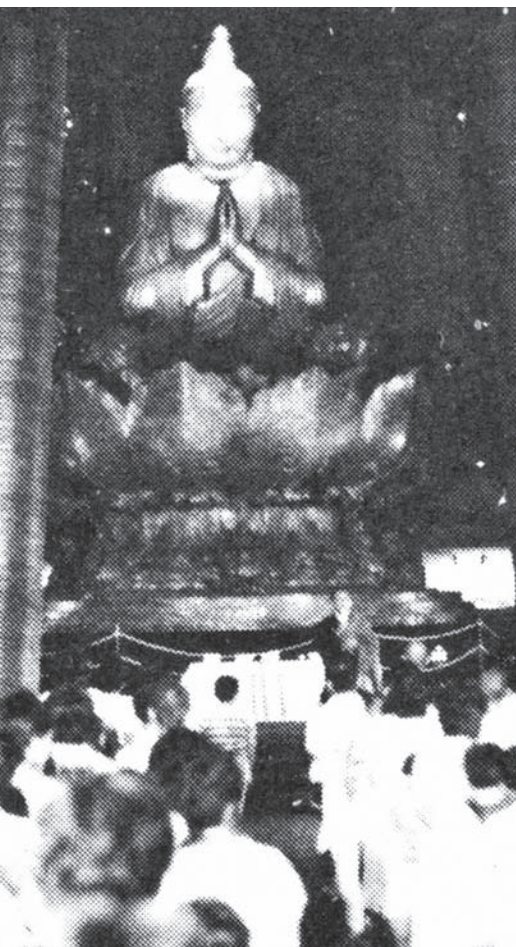
洋上子供セミナー

また昭和59年8月22日から25日には、3泊4日の旅程で「洋上子供セミナー」が開催されました。実に200人を超える参加者を乗せたフェリーが22日朝に大阪南港を出発し、目的地である沖縄に向かいました。船上でも研修があり、無着成恭老師（元TBSラジオ「全国子ども電話相談室」回答者）と渡辺長武氏（東京オリンピッククルスリング金メダリスト）を講師に迎え子ども達の学びの機会を作り、ゲーム・船内見学・サイン会等が催され充実した時間を過ごしました。食事や入浴の管理については全曹青会員が担当し、円滑に運営が行われました。

沖縄に着いてからは分乗してバスッ

アーが行われました。ホテルでのキャンプファイヤー等も子ども達の心を活気づけ、最終日には摩文仁ヶ丘の平和祈念堂で戦没者に対する施食供養が厳修されました。

創立10周年記念事業は、以上の二つの事業の他に、加盟曹洞宗青年会の研修会の講演をまとめた単行本『緑蔭説法』の出版、「第7回禅文化学林」として開催された中国・天童山拝登研修がありました。曹洞宗門内、あるいは仏教界に限らない活動の可能性を一杯まで広げた一連の事業といえます。社会に全曹青が積極的に入っていくような展開がなされました。全曹青のその後の活動では社会と大いに交わる事業が見られるようになりますが、「護持会のみを支えられた教団」からの脱却を強く意識していた初期全曹青にとって、意義のある帰結としてこれらの創立10周年記念事業が展開されたのです。



・平和祈念堂

洋上子供セミナー

日時 昭和五十九年八月二十二日

日 二十五日

講師 無着成恭先生

渡辺長武先生（ゴールドメダリスト）

指導 曹青会員

目的地 おきなわ

使用船 大型フェリー飛龍二号

募集人員 二〇〇名

参加費用

大阪着（小）四六、五〇〇円

（中）五〇、〇〇〇円

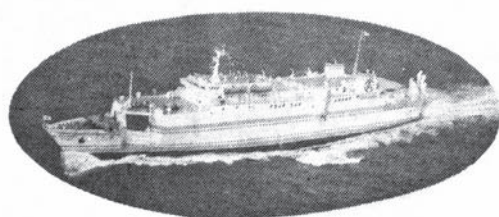
（大）六二、〇〇〇円

名古屋着（小）四八、〇〇〇円

（中）五一、五〇〇円

（大）六六、〇〇〇円

東京着（小）四九、五〇〇円



（中）五三、〇〇〇円
（大）六八、〇〇〇円
詳細についてはパンフレットを参照して下さい。

第2期会長 石附周行 紫雲臺猥下

全

国曹洞宗青年会が発足されていく契機は「緑蔭禪の集い」運動が、宗門の教化活動として大きく評価されたことに始まります。内容の評価と事業の発展を模索して宗務所単位に行動している折に、全国組織としての青年会発足の提案が宗務所よりあり、各宗務所を経由して参加に臨んだように思います。

全国から集った代表者は活発に交流し、会の運営について話した結果、メインテーマを『大衆教化の接点を求めて』とし、「禪の集いリーダー養成」「自己研修としての移動講座による学習会」「法式・法要の研修」「禪の文化に

関して、茶道や墨蹟等々」。その他、沢山の課題が掲げられ、これらを学習するために、「禪文化学林」と命名し管区を移動しながら研鑽することを合意したと思っておこします。



で全体を引張ってくださいました。そして、全国9管区で「禪文化学林」を開催する計画を立てられ、順次開催を進められました。全国一巡にたどり着いたのは、第2期の終わりだったと思います。全曹青のお陰で全国に法友がで

き、巡回した「禪文化学林」のお陰ですばらしい経験を存分にさせていただいたことを思い出します。

「緑蔭禪の集い」リーダー養成も順調に進み、禪の集いが全国的に広がっていったのも、そして禅文化を取り入れながら、新しい宗門教化活動に展開されたのも全曹青の功績は大きなものがあつたと思います。

青年会は定年制を設けていたから年々卒業していくこととなるわけですが、その後、宗門にボランティア会を発足させたすばらしいリーダーもいました。各僧堂や宗務所で活動をされた方々等、禪の集い運動が残した功績は多大なものがあつたといえましよう。

第6期会長 吉岡棟憲 老師

青

年僧は若さが命だ。若さには完成度が高い老僧の魅力とは別の魅力が溢れている。失敗を恐れずまっすぐに進む行動力、老僧にはない斬新な発想、これが青年僧の特権だ。青年僧だからできることを、青年僧の間に悔いなく行動してほしい。

全曹青が誕生して50年が経つ。この50年間で最初から見届けてきた宗侶も少なくなつた。その生き残りの一人として感謝しているのは、初代会長から代々「禪文化学林」の教場を海外に向けてくれたことだ。そのお陰で私も第1回のインド仏跡巡拝へ、さらにはインドネシアボロブドゥール遺跡、中国天童寺参拝が叶った。私の会長時代にはスリランカへ赴き日本式坐禅堂を建立できた。その後もタイ、ネパール仏教巡礼も実現した。今でも当時の思い出が鮮やかに蘇ってくる。青年僧時代の貴重な体験と経験は必ず血となり肉とな



る。海外にも目を向けて研鑽を深めよう。

老僧となつた私から青年僧へのお願いがある。超少子化は大きな問題だ。このまま放置しておけば、地方自治体を消滅させ日本を駄目にする。曹洞宗でも大本山や修行道場はもとより、自坊の存続すら危うくなる。この少子化問題は誰も予測できなかったのか、知っていても手をつけなかったのか。今では遅すぎると言われる少子化対策、国も行政も良い案が出ない中時間だけが過ぎていく。

もし、青年僧の素晴らしい叡智と連帯、行動力でこの問題に一石を投ずれば、青年会や宗門の評価は格別のものとなるのは間違いない。地方が無くなる、お寺が消える。この危機的状況を真剣に、そして本気に考えてほしい。この難局に挑戦できるのは青年僧だけである。憂える老僧は間もなくこの世から消えていくのだから。

第7期会長 神野哲州 老師



全 曹青は第6期に全国的な組織となりました。設立時に目指した僧俗一体とは異なり、スローガンの『大衆教化の接点を求めて』という社会活動を伴う実動組織としての性格を明確にしております。この前提のもと、第7期には「全曹青ここにあり」という活動が求められました。

若い力が結集し、その活躍が社会的な評価を受けるものであれば組織は発展します。よく、「次代を担う青年僧」と紹介されましたが、私どもは「現代を担う」と自負し、活動で僧侶の社会性を示そうと考えました。これは現役の皆様も同じでしょう。

そこに奈良県・奈良市・NHK主催の「なら・シルクロード博」企画案が持ち込まれます。シルクロードを経由して日本で開花した東西の文化。ここに仏教が大きく含まれることは申すまでもなく、現代仏教を示す絶好の機会です。現実には、曹洞宗は古都には特段の縁もなく、県の主催に宗教団体

が参加することに難しい指摘を受けましたが、奈良曹青と奈良の青年僧の絶大な協力を得たことで大きく進み、東大寺様での「花まつり千僧法要」の開催、博覧会では舞台「ブッダ・シヤカ・ムニの誕生」の上演となります。国宝元興寺様で半年にわたって青年僧が腕を振るった「精進料理」は、禪に触れる貴重な機会を提供できました。時はバブル期です。足元を忘れがちな時、奮い立たせてくれたのはSVAとの協力関係であり、何よりも活動を信条とする多くの仲間、結果に感謝しております。

活動が一時の花火で終わっては残念です。次の期は「次代ではなく時代を担う青年会」とさらに広げてくれました。千僧法要には、50年後の「2038年に迎える仏教伝来1500年」に行われる仏教活動の序奏との思いがあります。継続してくださる皆様に心より感謝し、その時を一緒に迎えたいと願っております。

第9期会長 木南広峰 老師



第 9期のスローガンは『慶事としての仏教』でした。その2本柱は「花まつりキャンペーン」と「仏前結婚式」でした。

「4月8日はしあわせの日：あなたの大切な人に花を贈りませんか」と銘打ってポスターを作製、全国に1万2000店の加盟を持つ一般社団法人日本生花商協会とタイアップして一般にアピールしました。前述のポスター、カードを配布、カードには花まつりの意味を分かりやすく簡潔に記し、花を供え、贈る方へ心のこもった言葉を書き入れられるようにしました。贈る花は恋人ならばバラ、友人ならば季節の花、亡き人ならば菊…。心のこもった花を御仏に供え、多くの人に花を贈る、そんな4月8日にしていきたいと思いましたが、人々の心の花を開花させ人間が本来の仏にかえり、さらに地球に平和の花の実が生まれるように：そんな趣旨のもとに運動を展開いたしました。このキャンペー

ンが形は変わっても現在も続いていることに深い感動を覚える次第です。

「仏前結婚のすすめ」は、ポスターを作成し会員諸兄に配布、現状把握のためにアンケートを実施しました。多くの人に仏前結婚式を知っていただくためにポスターは必要と考えました。美しい心との出会い、それは深い縁によるものです。それこそが大事な布教の場だと考えたのであります。

全曹青第9期はさらに「第11回禅文化学林」としてアメリカのロサンゼルス、サンフランシスコの禅センターを訪ねました。また講師一覧パートIIの作成、第2回全国ソフトボール大会開催、会則の一部見直し、新会員リストの作成等々の活動を行いました。

血気盛んだったあの頃、顧問を務めていただいた今は亡き第8期会長伊藤道宣師との思いも胸に筆をおきます。

第10期会長 吉川俊雄 老師

創

立20周年であった。就任の挨拶では江戸時代の若者衆をたとえに挙げたのを思い出す。彼らの立場は地域の中心にあり、自由闊達な行動が許されていた。青年僧侶もそうありたいという願いを込め、大衆教化の接点は各地方曹青、及び個々の会員という支流にこそ在り、それらが合流する参加型集団を目指す述べた。

平成6年は終戦五十回忌にあたり「全曹青20周年事業 終戦五十回忌写経運動」を開催し、会員が鶴見に集結。全国から約1万3000巻の写経を納め、「五百羅漢に出会う」のテーマで、羅漢拝、万国殉難追善法要、平和祈願大般若会を修し、3000人を超える大結集となった。この日は会にとって新たな出発を誓う「成人式」であり、非戦を願う新たな「平和元年」である。

年が明け1月。阪神・淡路大震災が発生。思いのある個々が、地方の青年僧侶が現地に集結する中で全曹青の持つネットワークが機



能していったといえる。『全曹青会員名簿』平成6年版が活躍し、又写経活動名簿による支援もお願いした。人も物も集まり、宗務庁、両大本山、ボランティア会、大学生等が一体となることができた。

神戸で活動基地を受けていたいたのは八王寺様であった。「般若林」である。次に時宗の真光寺様に移転した。ここには「大檀林」という大門柱が立っていた。老若男女、学生、そして僧侶が集合し、そこはまさしく四衆和合の叢林であった。

組織にとらわれない行動が、新たな組織を生んだ。それは真摯な活動があつてこそ生まれてくるモノであろう。大震災という未曾有の事態での経験ではあるが。思えば、会の長としての力不足もある中、迷惑も掛けた。反省してもしきれない。しかし全曹青は多くのことを教えてくれたし、学びの「林」で在った。今もなお全曹青は学林である。50年を経て。

第11期会長 櫻井朝教 老師

第

11期発足の年、阪神・淡路大震災が発生。第10期吉川会長のもと救援活動を開始。各地域曹青並びに宗務庁等にご協力いただきながらの活動でした。

以降、地元神戸市長田区御管地区の要請とご協力により復興花まつり法要、一周忌・三回忌慰霊法要、東京での「阪神・淡路大震災被災者支援チャリティ花まつりファミリーコンサート」へと繋がりました。関係諸団体の皆様のご協力のもと初めて全曹青として実働展開、まさに全曹青ボランティア元年の年でもありました。

お陰様にて現在も全国からご参集の諸師により途絶えることなく御蔵北公園内の慰霊モニュメント（題字「慰霊」は当時の大本山永平寺貫首 宮崎奕保猊下御揮毫）前にて慰霊法要が営まれております。特に中心となつてご活躍をいただいております兵庫第二曹青の皆様には深く感謝御礼申し上げます。



ます。パソコン通信が災害情報提供に果たす役割が初めて世間で認識されました。また、寺院の様々な事務でのパソコン利用の可能性について話題に挙がるようになり始めておりました。

そのような中でパソコン通信研究部会の立ち上げ、2年目の平成8年4月12日にパソコン通信PCvanを利用した『ネット全曹青』とインターネット布教教化を目的とした全曹青ホームページ『般若』を開設。『曹青通信』ではパソコンの利用方法についての様々な情報提供を始めました。

現在全曹青のボランティア活動、ホームページ『般若』等目を見張るものがあります。益々のご精進を期待しております。大衆教化の接点は大衆の中にあリ。瑩山禪師七百回大遠忌の記念すべき年、青年僧お一人お一人の地元地域社会での積極的な活動や発信を一層願うものです。

第6期



新たな結集で
教化の実りを



団体加入36団体



日航機墜落事故犠牲者
慰霊法要に参加

1985 禅のつどい中央研修会「両国佐渡ヶ嶽部屋」

団体加入促進(2年間継続)

会員名簿再編

広報誌連載「此処に和尚在り」開始

ソフトボール大会(全国4地区開催)

後期禅のつどい研修会【東日本会場】「食・地域に根ざした教化と実践」(宮城)

日航機墜落事故慰霊法要(群馬曹青協働)(群馬)

後期禅のつどい研修会【西日本会場】「食と体」(愛媛)

第8回禅文化学林「花まつり・南こうせつコンサート」(静岡)

「禅のつどいカード」作成

前期禅のつどい中央研修会「君は知っているか? 新宗教の青年活動を訪ねる」

ソフトボール大会(全国5地区開催)

後期禅のつどい中央研修会「宗教者とカウンセリング」

1987 第9回禅文化学林「スリランカ仏教遺跡研修の旅」

『曹洞宗青年会名簿』発行

第7期



社会に繁栄する
曹青作り



前期禅のつどい中央研修会「生命の始まりはどこか・得度式研修」

『曹洞宗のしきたりと作法』発行

後期禅のつどい研修会「禅の会」(佐賀)

『結子の作り方』発行

パソコン講座講師派遣受付

1988 会員意識調査実施

花まつり千僧法要(なら・シルクロード博)

花まつりウィーク(なら・シルクロード博)

坐・精進料理(なら・シルクロード博)

ミュージカル『ブッタ・シャカ・ムニの誕生』公演(なら・シルクロード博)

『手縫い結子セット』頒布

仏足跡(石)奉賛運動

花まつりカード頒布

「宝慶寺開山寂円禅師里帰り訪中国」派遣

1989 スリランカ禅堂落慶に参加(大本山永平寺貫首丹羽廉芳禅師御親修)

第10回禅文化学林「ネパール・タイ研修の旅」

第7期
会長・神野哲州老師
愛知県／地藏寺
頒布物や企画の充実
仏足跡(石)奉賛運動や手縫い
結子セットの頒布。またパソコ
ンが一般普及されてきた事を受
け、知識のある会員を講師とし
て全国に派遣する等、充実した
事業や頒布物が展開された。

『禅のつどいカード』作成
創立10周年記念事業の「洋上子
供セミナー」をきっかけに、子
ども達を対象とした禅のつどい
事業も注目された。これを受け、
各県で活用できるように若年層
向けの『禅のつどいカード』を
制作した。

日航機墜落事故慰霊法要
群馬県多野郡にある高天原山の
日航機墜落事故を受け、群馬曹
青に大きな協力をもらい現地山
頂での慰霊法要を厳修した。

団体加入促進
会員数増加を受け、個人加入か
ら各県の曹青会単位での団体加
入がさらに促進された。また連
絡協議体としての繋がりを強固
にするため、全国でのソフト
ボール大会も開催され、会とし
ての連帯感を促進した。

【第6期】
会長・古岡棟憲老師
福島県／円通寺

第8期

全曹青、百年の大計の為、
その布石たらん

1989

- 禅のつどい中央研修会「曹洞宗の法衣歴史・増上寺修養団見学」
- 広報誌定期購読者1000人突破
- 広報誌連載「尼僧団便り」開始

1990

- 創立15周年記念誌『好堅樹』発行
- タイムカプセル埋没法要(東大寺アショカピラー宝塔)
- 禅のつどい中央研修会「在家得度・カトリックと禅の接点」
- 会則変更
- 全曹青OB会「龍象会」発足
- 全国リレー托鉢
- 全国ソフトボール大会(東京ドーム)



1991

- 『禅へのいざない』発売
- 禅のつどい中央研修会「ヨーガと自己学見」
- 全国ソフトボール大会(東京ドーム)

1992

- 広報誌連載「寺院コンピューター見聞録」開始
- 花まつりキャンペーン
- 禅のつどい中央研修会「観音信仰」
- 「仏前結婚のすすめ」アンケート実施
- 『講師一覧』発行



1993

- 第11回禅文化学林「アメリカにおける禅を訪ねて」
- 花まつりキャンペーン



第9期

生きるための仏教
生きる支えとしての仏教

【第8期】

会長・伊藤道宣老師
愛知県／普濟寺

「尼僧団便り」連載

創立期より連携があった曹洞宗
尼僧団による寄稿連載が始まった。
相互理解を促進。

「禅へのいざない」

全曹青編纂(全4巻)、大東出版より発売した。各方面より有識者に文章をお寄せいただき、仏教や禅の成り立ちを歴史的・文化的側面から紐解いた。後半巻では、国内外における近代社会での禅の在り方や役割、宗教界の出来事等も解説。

【第9期】

会長・木南広峰老師
静岡県／貞善院

「花まつりキャンペーン」始動

第7期の「なら博」参画より花まつりの普及推進が進められ、現在も続いている「花まつりキャンペーン」がここで始動した。企画当初は生花店と協力し、花まつりカードの配布を主軸に展開されていた。

「仏前結婚のすすめ」

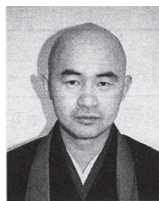
アンケート実施

第9期のテーマであった「慶事としての仏教」のもと、花まつりキャンペーンとともに仏前結婚式の普及推進が開始された。アンケート調査ののち、第10期にはビデオ資料が制作されることとなる。

Action 主な活動・事業

第10期

参加型集団としての全曹青へ



禅のつどい中央研修会「花まつり・仏前結婚式について」
広報誌定期購読者1500人突破
花まつりキャンペーン

1993

創立20周年記念「終戦五十回忌写経運動」
創立20周年記念「五百羅漢に出会う」(大本山總持寺)
シンポジウム「今問われている平和と曹洞宗の国際化」協賛(東京)
ビデオ『仏前結婚式Ⅰ』寺院篇』監修
ビデオ『仏前結婚式Ⅱ』一般式場篇』監修

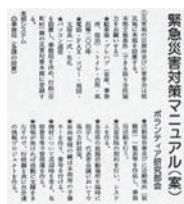
1994

阪神・淡路大震災発生
会長・役員、被災地入り(1月20日)
中国曹洞宗青年会連絡協議会と支援について協議
兵庫県神戸市八王寺(曹洞宗)を拠点に支援活動展開
救援はなまつり開催(4月7日)

1995

第11期

参加型集団へのさらなる展開



禅のつどい中央研修会「現代の狂気と犯罪」
ボランティア研究部会設置
パソコン通信研究部会設置
青少年教化研究部会設置
授戒会研究部会設置
第12回禅文化学林「カンボジアに学ぶ仏教と開発」(山口・長野の2会場開催)
年越し蕎麦炊き出し(復興支援活動)

阪神・淡路大震災一周忌事業
PC-VAN『ネット曹洞宗』開設
全曹青公式HP『般若』開設
全曹青花まつりin神戸長田
禅のつどい中央研修会「新興宗教について」
仏前結婚式 布教ビデオ制作

1996

阪神・淡路大震災三回忌事業
第13回禅文化学林「青年僧にのぞむ」
「花まつりファミリーコンサート」(東京)

1997

【第10期】
会長・古川俊雄老師
山口県／飯倉寺

シンポジウム「今問われている平和と曹洞宗の国際化」
国際布教の経験を持つ有志曹洞宗侶団体「SOTO禅インターナショナル」と協働し、シンポジウムを開催。創立20周年記念事業のテーマの一つでもある「平和」について、曹洞宗宗務庁石附周行伝道部長(現大本山總持寺紫雲墓院下)による基調講演と、有識者を招いてのパネルトークを実施した。

【第11期】
会長・櫻井朝教老師
長野県／泉洞寺

ボランティア研究部会の設置
これまでカンボジア難民支援等を実施していた全曹青に、初となるボランティア活動専門の部署が設置された。阪神・淡路大震災の経験を経て、以降の僧侶が行う災害復興支援活動の補助や実践を担う。

PC-VAN『ネット曹洞宗』
全曹青公式HP『般若』開設
パソコン通信研究部会が設置され、PC-VAN『ネット曹洞宗』や公式HP『般若』を開設。当初は掲示板機能等を活かし、意見交換の場にも活用された。

「花まつりファミリーコンサート」開催
復興支援を目的とした花まつり事業を継続する中、第11期終盤には東京を会場に花まつりファミリーコンサートを開催。法要とNHK「おかあさんといっしょ」歌のお兄さんをお招きの子ども向けコンサートを実施し、被災地支援のために多くのチャリティ募金が寄せられた。

第1回 仏法興隆花まつり千僧法要 人類の福祉と平和を願い日本仏教が団結

参画に向けて

な

ら・シルクロード博は、奈良県・奈良市とNHKが主催の県政100年の記念事業です。昭和63年4月より半年にわたり、平城京跡でもある奈良公園を中心に各所で開催、多くの大企業も参加し、最終的には来場者680万人を超える巨大なイベントでした。第7期では青年会活動の社会的展開を特に重視し、なら博への参画を目指し動き出しました。しかし、奈良県庁の担当者に直接問い合わせたところ、当初の判断は「宗教団体の参画は難しい」というものでした。

体制整備

参画実現に向けて東大寺を訪ねました。そこで奈良県を中心に超宗派で活動されている会「南都二六会」との機縁に恵まれます。両会で協議する中で、東大寺に僧侶が結集し釈尊に供養する「千僧法要」の案が生まれました。

「千僧法要」は、奈良時代に「千僧供養」として勤められた法要を転じた案です。聖武天皇が人々の平和・安寧のみならず、生きとし生けるものとの共

存繁栄を願われて建立した毘盧遮那仏。その開眼に千僧（実際には万を超えるとも）の多くを招き供養したという故事に由来します。毘盧遮那仏の御前で人類の福祉と平和を願い、移行行く社会課題に向き合いながら、生きとし生けるものと共に歩む誓願を立てる。それはこれまでの歴史上、聖武天皇と平清盛しか成しえなかった儀式であり、それを我々で行おうという大きな過ができていきました。

ただ千僧法要の会場となる東大寺からも、全曹青単独での開催は考えてほしい、という意見がありました。また、なら博主催者は「シルクロードは、宗教・哲学・科学技術等の現代の社会システムを生み育てた『道』である」と表明していました。執行部はその宗教とは日本仏教すべてであることに鑑み、全日本仏教青年会にも呼びかけ、二六会を事務局とした各体制を整えました。これにより、なら博への参加が認められ具体的な企画が動き出しました。

全曹青内には近畿管区を中心とした特別委員会が置かれ、「千僧法要」、「花まつりウィーク」、「坐・精進料理」を企画の三本柱としました。関係諸団体や企業にも周知し、BS観光、イベント



会社、飲食店などのご協力も頂戴しました。宗派・地域の垣根を超えて団結力を高めていきました。

千僧法要

昭和63年4月26日、最大の行事である「千僧法要」を迎えました。当日は天候にも恵まれ、全曹青より900人、各宗派や海外からの参加も合わせると1700人の僧侶が参集し、稚児などの一般参加も合わせると3500人以上が東大寺に結集しました。

正午、奈良公園・荒池より僧侶、象やラクダ、稚児の行列が東大寺に向けて歩みだします。大仏殿に至り開始した法要では、全僧侶が三帰依文を唱和し五体投地の礼拝行を行いました。神野第7期会長（全日仏青第6代理事長）が仏法興隆と世界平和を目指す誓願文を奉読し、合唱団による仏教讃歌が流れるなか第1回「千僧法要」は円成しました。

半年にわたる事業展開

千僧法要の円成を皮切りに、全曹青主催の各行事を展開しました。奈良市元興寺においては5月23日に灌仏会を勤め、25～27日にはなら博イベント会場で、新作仏教ミュージカル『ブッタ・

シヤカ・ムニの誕生』を公演。本作は関西の複数の劇団や日本歌劇学校からキャストを迎え、全曹青会員も黒衣の托鉢僧として出演しました。3日間6公演で8000人を超える来場でした。

10月1～23日には、元興寺を会場に「坐・精進料理の集い」が開かれ、近畿管区・奈良県曹洞宗青年会を中心に、全国各地から典座寮員が集まりました。延べ1500人を超える来場者に精進料理を提供し、坐禅と法話で禅の世界に触れる機会を届けました。

なら博終了後

なら博終了後も、全日仏青主催事業として毎年「千僧法要」を継続することとなりました。平成元年には、全優石からの寄進で建立したアシヨカピラー宝塔に全国から集まった8000を超えるタイムカプセル埋没法要も行いました。千僧法要50周年にあたる令和20（2038）年には、それらの返送も行われる予定です。多くの宗派、関係団体・企業の方々と連携生まれた当法要は、全曹青・全日仏青にとって欠かすことのできない事業となりました。





全国リレー托鉢・全国ソフトボール大会 全国の青年僧侶を繋いだ連携事業

全国リレー托鉢

全 国リレー托鉢は、第8期にあたる平成2年に、托鉢の伝統を通じて現代社会に寄り添う青年僧侶としての自覚を示す事業として企画しました。

実現に向けて広報誌での周知はもちろん、加盟如何を問わず当時あった全国60の曹青会すべてに呼びかけ、参加の是非や日程調整を行いました。そこから寄せられた意見も執行部で共有し、実現に向けて綿密な計画を進めました。

実施にあたり、第3期の全国一斉托鉢で使用した幟旗を復刻し、参加曹青会に配布しました。期間は両祖忌明けより臘八撮心前までの2か月間で、平成2年10月1日の鹿児島をスタートとし、各曹青会の地元を中心に担当区間を振り分けました。日程都合もあり完全なリレー形式は取られませんでしたが、38団体1200人を超える参加者が揃いの幟旗を掲げ、日本全国を縦断しました。現在も当時の幟旗を使用し

て托鉢を修行している青年会もあり、世代を超えて意志を繋ぐ事業となりました。

全国ソフトボール大会

青年会活動は多くの青年僧侶の連携によって生まれるものですが、そのきっかけとなる交流に主眼を置いた事業が、全国ソフトボール大会でした。全曹青では第6期より地区毎のソフトボール大会を開催していましたが、第8期では全国一丸に交流の場を持つことを目指し、東京ドームでの全国大会を企画しました。

実現のために日本シリーズの予備日に開催日を設定するなど、様々な交渉により平成2年10月31日に開催することができました。当日は全国各地より20チーム150人を超える青年僧侶が東京ドームに集結し、第1回大会優勝を勝ち取ったのは静岡県第四宗務所青年会照自会、準優勝は曹洞宗山梨県青年会でした。

各所から参加した曹青会は大会前日

から互いの親睦交流を深め、大きなけがもなく笑いと拍手の絶えない大会となりました。本事業は参加会員からの要望により翌年も同会場で開催され、全国の連携をより強めました。

第8期は全曹青への団体加入が進んだ期でもあり、これら事業は、各青年会同士の繋がりを強固とする意図を多分に含むものでした。各地の青年僧侶や曹青会が主役となる両事業を通し、全曹青の連絡協議体としての在り方を大きく推進することとなりました。



全曹青創立20周年記念事業

「終戦五十回忌写経運動」 「五百羅漢に出会う」

平成6年に全曹青が創立20周年を迎えることを受け、第10期では「終戦五十回忌写経運動」「五百羅漢に出会う」という二つの事業を主軸とし、創立20周年記念事業を展開しました。

終戦五十回忌写経運動

平

成6年が太平洋戦争終戦五十回忌にあたる年であることを考慮した事業でした。戦争を容認することしかできなかった当時の宗教者の状況を顧みるとともに、終戦50年の節目に「非戦」をテーマとした企画を推進し、平和の願いを次世代に繋ぐことを目指した事業でした。写経運動を企画した理由は、書写を通して戦争で命を失った人々への慰霊と戦禍で苦悩する人がいることを悼み、誰もが世界の反戦平和の誓願を立てることができるからです。

活動の内容としては、全国約1万5000ヶ寺に無料で写経用紙と見本・チラシ・ポスターを配布し、賛同いただける方に1枚1000円の納経料を添えてご返送いただくというものでした。企画の段階では、写経用紙を販売するのか、写経していただいた用紙を集めるのかという議論がありま

した。少しでも多くの写経を集めるために、ポスターを持参し梅花流全国奉詠大会をはじめとして日本各地を回りました。その結果1万3112巻の写経が集まりました。全国からお寄せいただいた写経は、大本山總持寺大祖堂で供養諷経を行い、佛殿前に建立されている観音様に納経させていただきました。

五百羅漢に出会う

青年僧侶を羅漢様になぞらえ、全曹青が20周年目という二十歳の成人式を迎える期に、新たなスタートの決意として青年僧侶が大本山總持寺に大結集するという事業でした。法要前に東京から大本山總持寺まで托鉢し行脚するという企画（未開催）も検討し、青年僧侶の結集によって生まれる大きな推進力を特に大切に考えた事業でした。

当日は大本山總持寺の大衆も合わせ多くの僧侶が結集し、大祖堂で法

要を勤めました。吉川第10期会長が羅漢供養の導師を務め、「万国殉難者追善供養法会」と「平和祈願大般若会」を梅田信隆紫雲臺猊下に御親修いただきました。「平和祈願大般若会」では随喜者に大般若を10巻ずつ配り、皆で約1800巻の大般若を振ることができました。法要後には、当時大乘寺専門僧堂の堂長をお務めになられていた板橋興宗禪師に、「足を組むことが坐禅ではない」と題し記念講演をいただきました。

こうした記念事業の開催から程なく、阪神・淡路大震災が発災します。20周年という成人の新たなスタートを誓った全曹青は、それまで国外の難民支援等を主としていたボランティア活動から、災害復興支援という新たな活動へ向き合うこととなっていきます。人々の安寧を願い結集した記念事業の想いは、そこで確かに引き継がれていくこととなりました。





阪神・淡路大震災 全曹青による復興支援活動の始動



平

成7年1月17日、淡路島北部を震源に阪神・淡路大震災が被災しました。当時の全曹青は第10期の終わりを迎える時期で、創立20周年を迎えた直後にあたります。それまで全曹青は被災地に直接入ったの支援を実施したことはなく、すべてが手探りの状況の中で様々な復興支援活動を実施しました。そしてこの出来事を経て、全曹青のボランティア活動の体制は整備されていくこととなりました。

発災初動

1月20日、現地に入っている医療団から貰った地図と、ラジオの情報を頼りに、吉川第10期会長・原田中国管区理事・藤田事務局次長が救援物資を持って神戸に入りました。現地の状況を確認し、すぐに各地加盟曹青会を交えて支援体制を協議、24日付で支援活動が開始されました。

炊き出し（補助給食）

全曹青としての炊き出しは、発災9日目の1月25日のお昼に、1000人分の味噌汁を作ったのが始まりでした。すでに定期的に3食が配膳されていたが、多くの避難所では防災のため火を使うことが禁止されており、温

かい食べ物は手に入りにくい状況でした。野菜などの具が沢山入った温かい食べ物を振る舞い、補助給食として活動しました。

わずかな人数と小さな卓上コンロから始まった炊き出しですが、その後全国から集まった青年僧侶と機材により、最終的には1日2万食近く提供することが可能となりました。初期の炊き出しは3月10日まで継続し、終了時点では水道が8〜9割復旧し飲食店やスーパーが稼働し始めました。この間、27万5032食を提供し、各県曹青会をはじめ40を超える団体にご協力いただき、延べ2648人が活動しました。

被災者と支援者の 絆を越えて（傾聴）

炊き出しは、人手と機材が確保できる状況では仕込みの段階から積極的に避難所で活動を行いました。押しつけにならないように配慮しながら、避難者や地域の方と共同作業することで交流の場となり、人間関係が構築されました。兵庫区明親小学校では地域の方が多く参加して調理が行われ、活動最終日には送別会が催され、青年会員に感謝状と花束が手渡されました。別の避難所でもお別れ会が開かれ、被災者

とボランティアが一つの輪となって火を囲み、和やかなカラオケの歌声に包まれました。また、3月に入ると現地での喫茶説法(行茶活動)が求められるようになり、「坊茶論」「デリバリー法話」と称して活動を継続しました。

各種法要

各地で各団体主催の法要が行われておりますがここでは全曹青に関わる3つを紹介します。

阪神・淡路大震災復興支援
「はなまつり」

日時／平成7年4月7日

場所／神戸市長田区菅原通り

参加／約5000人

曹洞宗僧侶約150人

一般ボランティア約50人

日本生花商協会、菅原商店街商工組合などと協力して開催されました。午後1時半から打ち上げ花火を合図に祭りは始まり、たこ焼き、お好み焼きなど22店の露店が並び通りに活気が戻りました。約3万本の花が提供され、慰霊法要、灌仏会法要が厳修されました。「子ども達のこんな笑顔を初めて見た」という声も聞こえる中、復興への祈りを共にしました。



特集

「御菅地区一周忌合同慰霊祭」

日時／平成8年1月17日

場所／菅原市場仮設会場

参加／約120人

全曹青会員20人(全日仏青会員)

午後1時半より長田区御蔵・菅原地区一周忌合同慰霊祭実行委員会主催、全曹青主管のもと厳修されました。会場は遺族をはじめとする関係者で埋め尽くされ、献花・焼香には絶えることなく人々の列が連なり、午後3時近くまで法要は続きました。また、曹洞宗国際ボランティア会(SVA)(※当時)によるバザーも行われました。

阪神・淡路大震災被災者チャリティー

花まつりファミリコンサート

日時／平成9年3月27日

場所／東京都日本青年館ホール

現地以外の人々の記憶が薄まることを懸念し、東京都で開催しました。午前には都内10ヶ所で震災被災者へのチャリティー街頭募金を行い、午後からは日本青年館ホールで、花まつり灌仏会法要、阪神・淡路大震災三回忌法要を厳修し、その後ファミリコンサートを行いました。NHK「おかあさんといっしょ」の坂田おさむ氏に出演していただき、幕間には集められた募金・支援金を贈呈しました。

その他にも、平成8年4月6日には神戸市長田区で「花まつり行事」、平成9年1月16・17日には各地で三回忌法要が営まれました。各法要からは被災地と支援者が垣根なく協働して執り行われていることが伺えます。30年たった現在でも信頼関係は変わらず、発災日には各地域の公園などで地域の方と僧侶で法要が営まれています。

各寺院・団体との関係

兵庫区八王寺の無事であった研修道場の一部を、活動拠点として1月24日から2月15日までお借りしました。2月16日からは兵庫区真光寺にプレハブを建てさせていただき、拠点を移転し支援者のトイレとお風呂を確保することが可能となりました。

SVAとは、情報の共有は勿論のこと、食材や機材の管理・運用を協力して行いました。また避難所で活動を行う際には、事前に情報をご提供いただくことで計画を練ることができました。炊き出し活動には青年僧侶だけではなく、両大本山や専門僧堂からも雲水が参加しました。

関係各所より多大な支援金・支援物資を頂戴し、全曹青では初となる災害復興支援活動が実施されました。

第12期会長 寿松木宏毅 老師

全

曹青が創立50周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。この節目の年に立ち会うことができましたことは、ひとえに多くの諸先輩老師をはじめ、会員皆様方のためまぬご努力の成果に他なりません。

第12期全曹青は平成9年から2年間、青年僧の在り方をみつめ、組織の意義を問い直すことを軸に活動しました。

当時を振り返って見ますと、平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災を機に、全曹青の活動は時間をかけ模索し、大きく変化してきたと思います。第12期は前期の全曹青ボランティア元年と言われた櫻井会長の事業を引き継ぎ、新たな改革が求められました。会則の改正から始まり、年会費の見直し、管区曹青会との共同事業、災害マニュアルの更なる見直し、それに伴い加盟曹青との連絡強化、



広報誌『そうせい』の誕生などが挙げられます。今後の全曹青の組織と活動に深く関わってくる重要な課題ばかりでした。変えるべきこととは思いつて変え、変えられないことは変えないという判断が常に求められていたと思います。

震災や災害などが起きるたびに、青年僧は様々な危機を敏感に感じ取るに違いありません。大事なことは目の前で起きている問題にいち早く気づき、それを自らのこととして受けとめることです。そのうえで仏教の教義に照らし、仲間が智慧を絞り合い、気概を持って行動に移していくことが、活動の原点であると私は考えます。

そうした青年僧の結集の威力、僧宝こそが宗門の、ひいては明日のよりよい社会を決定していくものと私は強く期待しております。

第13期会長 荒木正昭 老師

全

曹青創立50周年を迎えて思うことは、まず青年宗侶として同じ目標を目指し歩いて来た50年間だと思います。檀信徒の皆様方はどうしたら一佛兩祖の思いをお伝えできるか、どうしたら若い人達にお寺へ足を運んでいただくか。第13期会長をお受けさせていただいた当時は執行部の皆さんと何度も熱く語り合い事業を進めさせていただきました。それぞれの青年会は皆同じ様に青年僧ならではの発想と行動を模索し続けて、現在に繋がっています。

当時は阪神・淡路大震災の慰霊祭(法要)をどうするか、地元神戸へ何度も足を運び話し合いをしたことや「禅文化学林」をどの様な形で行うか等、頭をかかえながら会議を重ねたものでした。その他には広報誌『そうせい』をもっと読みやすく青年僧侶に身近な内容にと広報委員長を中心に充実をはかり



ました。今では『そうせい』はその後の歴代の会長様や執行部の方々のアイデアと努力のお陰ですばらしい広報誌を読ませていただいております。

今後の青年僧侶への想いとして地方の過疎化、少子化等で檀信徒の減少がさらに進むと予想されます。また自然災害が起きた時等、青年僧侶ならではのアイデアと対応を今実践なされていることの継続、そしてさらなる進化を期待しております。

全国の青年僧侶が思いをひとつにして意思の疎通を図り、これまでの困難を乗り越えて来たようにこれからの難局にも力強く向かう情熱の集まりこそが全曹青だと思います。これまでの全曹青の諸先輩の方々に感謝し、これからの若い宗侶の皆様方に期待の心を以て、今後も応援し続けたいと思います。

第14期会長 池上幸秀 老師



第

14期は、『21世紀プロローグ』とどろけ全曹青のハーモニークのスローガンを掲げて平成13年にスタートした。宗門では高祖道元禪師七百五十回大遠忌「慕古心」のテーマで報恩事業・法要を修行される中、全曹青は高祖様のお言葉を相承実践する「慕古事業」を策定した。各県加盟曹青会員約2800人には『正法眼蔵八大人覺』の浄写を、檀信徒には高祖様の詠まれた和歌3首の浄写を勧募し、5409巻を大本山永平寺納経塔に納めた。また、『正法眼蔵洗浄巻』を参究し、「東司掃除」を寺庭・檀信徒と共に全国の青年会が実践した。大遠忌局のお誘いで、8月29・30日を「青年会の日」と定めて大本山永平寺に約250人が報恩拝登した。熱気のこもる法堂の高祖様ご真前での夜坐、青年僧達の低音が響き渡る『八大人覺』読誦。翌朝は全山東司掃除にはじまり、本講では「慕古の慶快」と題して檜崎通元老師が『洗浄巻』

を解題された。同年11月27・28日、「禅文化学林」を開催。初日は駒澤大学記念大講堂で、『永平広録』の権威大谷哲夫老師と金子みずゐ作品を世に出した矢崎節夫氏のシンポジウム開催と、映画『AIKI』（監督 天願大介）を約700人が聴講鑑賞して好評を博した。2日は曹洞宗檀信徒会館で三分科会を開催して約260人が再結集した。僅か3か月で2度の結集が円成したのは、当時の評議員、理事の諸老師のご協力の賜だった。他方、『そうせい』誌面を刷新し、加盟曹青会の活動を誌面に紹介して全曹青との架け橋とした。伝道句集『君だけじゃない』の作製等、精力的に活動成果を発信した。議論が白熱し、たまに出る不協和音も含めて、オーケストラの如く、「全曹青交響曲第14番」を奏できり、そのハーモニークをとどろかせた。しかし、素晴らしい仲間達と成し遂げた至高のセッションは「ことば」では語りきれない。

第15期会長 山口英寿 老師



第

15期のスタートにあたり、第8期に刊行された『曹青通信』の復刻版である『好堅樹』を精読し、第2期『曹青通信』で発表されたシンボルマークを復刻し、スローガンは「燃え上がれ青年のエネルギ」としました。人事面では、加盟青年会の会員一人一人が全曹青の会員であるという観点から、管区理事を中心に多くの委員を推薦していただきました。私自身が第13期・授戒会研究委員会と全曹青に出会い、熱い議論を交わした経験から、より多くの青年僧が全曹青に参加し、刺激を受けてもらいたいとの思いがあったからです。

30周年記念事業に関しては、阿部光裕実行委員長を中心に、「生老病死の大海を泳ぐ」私がみつめ自らが行い自分の言葉で語る」というテーマのもと、九州・北海道・四国・近畿・中国・東日本3管区（東北、関東、北信越）・東海の7会場において開催し、1000人を超える方々にご参加いただきました。一会場での開催では参加者の負担が大きいと思ったこと。さらには加盟青年会の皆様にも記念事業の準備からご参加いただき、ご自身が全曹青の会員であることの再確認をしていただきましたことから。現在、青年会員でいらっしゃる皆様には、地元青年会はもちろん、全曹青の活動にも積極的に参加し、様々な経験をしていただくことを強く希望します。広報・青少年教化・ボランティア・法式、各委員会々充実した事業を行っていただきましたが、紙面の都合上割愛させていただきました。詳細はWEB上で公開されている『そうせい』誌面でご覧ください。顧みますに、諸事業を無事に行えたのは、全国のご寺院様から多く頂戴した賛助会費のお陰でありました。厚く御礼申し上げます。

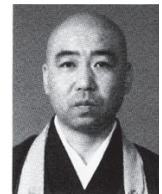
第12期
▼▼▼
足元からの変革

- 1997 ● 禅のつどい中央研修会「今、若者たちは何を」
● 会費見直しを決定
● 曹洞宗婦人会中央研修会・寿松木第12期会長登壇
- 1998 ● 阪神・淡路大震災追悼法要随喜
○ 広報誌100号記念号発行(『そうせい』に改称)
● 広報誌 第三種郵便申請(翌年6月認可)
● 第14回禅文化学林「青年僧に望む」(大分)
● 花まつり法要・研修「ハンセン病について」(東京)
● 冊子「全国曹洞宗青年会ボランティアネットワーク」作成
● ビデオ『血脈の研究』制作
● 禅のつどい中央研修会「血脈の研究」
● 「子供向け五観の偈・十重禁戒」作成
- 1999 ● 阪神・淡路大震災追悼法要随喜
○ 初期『花まつりセット』配布
● 第15回禅文化学林「青年僧に望む」(北海道)



● 禅のつどい中央研修会「あいだみつを～今が大事～」

- 2000 ● 阪神・淡路大震災追悼法要随喜
● 「花まつりキャンペーン」(『花まつりセット』頒布開始)
● 第16回禅文化学林「心の癒し」(四国)
○ 中央研修会「授戒シンポジウム」
● 報恩大説戒会(福島曹青35周年事業、授戒シンポジウムの一環として協働)
- 2001 ○ 第17回禅文化学林「祈り」PART 1 (阪神・淡路大震災七回忌法要・モニュメント除幕式)
○ 第17回禅文化学林「祈り」PART 2 (基調講演・座談会・ハンドベル演奏会)
● 「全日本仏教青年会全国大会」参加(荒木第13期会長提唱)
● 『各単位曹青活動報告集』発行
● 子ども向け教材『つどいのとも』発行
○ 中央研修会「授戒シンポジウム2」



第13期
▼▼▼
「若さと智慧」
を結集して

【第12期】
会長・寿松木宏毅老師
秋田県／永泉寺

広報誌第100号記念号の創立より発行されてきた広報誌が第100号を記念に一新。名称を『そうせい』とあらため、カラー表紙の冊子となった。またこれに合わせ第三種郵便の認可申請を行い、1999年6月に認可された。

『花まつりセット』
「花まつりキャンペーン」においてこの時期より『花まつりセット』を活用した普及促進が始まった。セット内容は、花の種・普及促進パンフレット・甘茶ティーバッグで、阪神・淡路大震災慰霊事業の折に初めて配布。以降第13期より、広く頒布を開始された。

【第13期】
会長・荒木正昭老師
熊本県／地藏院

阪神・淡路大震災七回忌
禅文化学林「祈り」
発祥より七回忌を迎え、曹洞宗兵庫第二宗務所青年会や諸団体と協働し禅文化学林を開催した。第1部は神戸市長田区御營地区において、70人以上の随喜衆による慰霊法要や大本山永平寺宮崎安保禅師の文字が刻まれた慰霊モニュメントの除幕式が行われた。第2部は神戸市メリケンパークオリエンタルホテルで基調講演や座談会、ハンドベル演奏会が開催された。

授戒シンポジウム
第13期の主事業として全2回開催された。アフターケア事業として、曹洞宗福島県青年会主催の「報恩大説戒会」とも協働した。

Action 主な活動・事業

第14期

新世紀プロローグ
〜とどろけ全曹青のハーモニー〜



2001
広報誌デザイン刷新(一部カラー化)
広報誌連載「SOUSEI INTERNATIONAL」開始
ボランティアネットワーク図作成
第18回禅文化学林「『天真に生きる』〜良寛さまに学ぶ安らぎの心〜」(福島)

2002
アフガニスタン難民支援寄付
中央研修会「正法眼蔵八大人覺」
委員会総会初開催
韓国曹溪宗体験安居研修(全曹青後援)
東司掃除運動(高祖道元禅師七百五十回大遠忌 慕古事業)
大本山永平寺報恩拝登「青年会の日」(高祖道元禅師七百五十回大遠忌 慕古事業)
傘松道詠の書写・納経(高祖道元禅師七百五十回大遠忌 慕古事業)
「千僧法要」随喜(10月開催)
第19回禅文化学林「今、言葉で伝えたい」(高祖道元禅師七百五十回大遠忌 慕古事業)
壁掛け伝道句集『君だけじゃない』制作



2003
壁掛け伝道句集2『あなたに向かって』制作
『ボランティアガイドブック』発行
『二師侍者心得』発行
中央研修会「曹洞宗と日本のイスラム教」

第15期

燃え上がる
青年のエネルギー



第2期シンボルマークを復刻
ミャンマー難民キャンプ訪問(SVA絵本事業に協力)

2004
第20回禅文化学林 創立30周年記念大会「生老病死の大海を泳ぐ」(東京)
DVD『DIGIそうせい 萬灯供養の手引き』頒布
『ほとけさまの知恵袋』頒布
中央研修会「生老病死の大海を泳ぐ〜禅の心と老師(TAO)〜」
福井豪雨ボランティア活動
「防災寺子屋 in 狭山」開催(埼玉)

創立30周年記念 九州大会「告知について考える」(熊本)
創立30周年記念 北海道大会「今、私達の生き方は、現場は…」(北海道)
創立30周年記念 四国大会「脚下を照顧する」(愛媛)
創立30周年記念 近畿・北陸大会「慈愛」(奈良)
第21回禅文化学林 創立30周年記念 中国大会「『戒』に学び、生死を観る」(山口)
創立30周年記念 東北・関東・北信越三管区大会「生老病死の大海を泳ぐ」(福島)



2005
阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
創立30周年記念 東海大会「初心〜今の自分に喝!〜」(愛知)
ボランティア基金 設立
創立30周年記念式典(東京)
中央研修会「萬灯供養・祈祷太鼓研修」

【第14期】

会長・池上幸秀老師
島根県／洞光寺

アフガニスタン難民支援寄付

アメリカでの同時多発テロとイラク戦争の開始を受け、SVA(シヤンティ国際ボランティア会)を通じて難民支援の寄付を実施した。以降もイスラム原理主義が社会で注目される中、広報誌特集や研修会で継続して取り上げ、宗教者としてこの問題に向き合った。

壁掛け伝道句集

自宅での活用はもちろん、寺院での配布物や記念品にも最適な頒布物として、多くの反響を頂戴した。第一弾の好評を受け第二弾も制作した。

韓国曹溪宗体験安居研修

後援団体として参加。全曹青荒木正昭顧問(第13期会長)が団長を務め、大本山總持寺板橋興宗禅師に随行し多くの青年僧侶が参加した。

【第15期】

会長・山口英寿老師
愛知県／長寿寺

ミャンマー難民キャンプ訪問

SVAの絵本事業への協力を兼ねて、タイにあるミャンマー難民キャンプを訪問した。

防災寺子屋 in 狭山

埼玉県狭山市慈眼寺で地域の子ども向け防災イベントを開催した。街歩きや防災マップの作成、応急救護体験等を実践した。防災時の活動が中心であった全曹青で、初めて若い世代への防災・減災を伝える活動となった。



大本山永平寺高祖大師道元禪師
七百五十回大遠忌慕古事業

青年会の日 大本山永平寺報恩拝登

第14期に展開した「慕古事業」とは、平成14年に厳修された高祖道元禪師七百五十回大遠忌に因み企画された事業です。曹洞宗僧侶の原点に立ち返りながら、さらには家庭仏教の実践を重んじ実施されました。

初期の計画段階より「慕古心」を大きな構想の柱として、綿密な話し合いがなされました。全曹青評議員会を母体に慕古事業実行委員会が設置され、平成13年には全国の青年僧侶を対象に大遠忌に関するアンケート調査を実施しました。そこで青年僧侶全体の意見と活動の指針を擦り合わせ、まさに青年僧侶一丸となる積極的な慕古事業推進体制を整えました。

活

動に関しては慕古の実践を総合テーマとし、様々な事業が実施されることになります。大きな事業の一つに、「大本山永平寺報恩拝登」があります。正当法要を1か月後に控えた平成14年8月29・30日を「青年会の日」と定め、全国の青年僧侶大結集の報恩大会が開催されました。また本事業を機とし、青年僧侶が慕古の実践となる『八大人覺』の書写をし、そして一般の方は『傘松道詠』書写から道元禪師の教

えに親しんでいただき、高祖大師御真前へ奉納する計画を立てました。

初日8月29日16時より開会式、19時より法堂内高祖大師御真前において、約250人の青年僧侶が夜坐一炷。一同対座ののち「正法眼蔵八大人覺」を読誦しました。翌朝、青年僧侶と徒弟参加者などで各班に分かれ、山内11ヶ所の東司掃除。続いて大講堂で愛媛県瑞應寺樺崎通元老師による「正法眼蔵洗淨—慕古の慶快—」と題した本講を賜

そして、家庭仏教の実践として全国的な活動となった事業が「東司掃除の実践運動」です。道元禪師は『正法眼蔵洗浄卷』で、お釈迦様が東司で羅喉羅に對し「出家はまさに苦を忍ぶべし」と説法された故事が祖々相伝してきたことを慕古の慶快と説き、東司は仏の道場なりとお示しにいられています。そこで青年僧侶として東司は仏道場であるという再認識と、家庭における東司掃除の大切さを伝える事業として、運動を展開しました。

先述の「青年会の日」での東司掃除に加え、期の終わりには大本山永平寺へ執行部6人で拝登し、山門脇の東司掃

また禪文化学林も慕古事業の一環として、平成14年11月27・28日の2日間で開催されました。初日は全曹青会員と一般参加者総勢700人が会場となつた駒澤大学記念大講堂を埋め尽くし、第一部は『今、ことばで伝えたい』、道元さまのおもい、金子みすゞさんのまなざし』と題した対談講演、第二部は映画『AIKI』が上映されました。翌28日は曹洞宗檀信徒会館に会場を移し、青年僧侶約260人が参集し、三部構成で講演と討論が行われました。

[illegible]

全曹青創立30周年事業

各管区記念大会で加盟曹青会の連携深める



第

15期には全曹青創立30周年を迎え、記念事業として各地で記念大会を開催しました。大会の全体テーマを「生老病死の大海を泳ぐ」私がみつめ自らが行い自分の言葉で語る」として、曹青会員個々が仏教者としての原点に立ち返り、真摯に自分の「生老病死」をみつめる機会を創出する事業としました。

四苦八苦の世界を生きることに僧俗の垣根はなく、私達僧侶も同じ社会を生きています。だからこそ僧侶は人々に共感できて、僧侶の行いに対しても人々から共感してもらえる。そういった関係性の大切さを今一度考える機会となる大会を目指し、様々な企画を持った大会が開催されました。

また個人加入で始まった全曹青は、第4期から団体加入を促進していました。先輩諸師による地道な努力の積み重ねにより、現在の各加盟曹青会を基盤とする連絡協議体としての体制が整っています。本記念事業では各加盟曹青会との連携を深

め、各地の曹青会の活性化が日本全体の青年僧侶の力をつけることに繋がると考えました。このことから全国7ヶ所の記念大会では、全曹青は予算面や広報などの協力を主に担当し、企画運営は各地域の曹青会に任せました。時代や地域的な問題への危機意識をテーマに、社会に求められるお寺・僧侶であるためにそれぞれの地域で必要なことを考え、大会を企画運営していただきました。

各大会テーマや実施内容を見ると、「生死」や「命」はもちろん、その「ひとりひとり」に対して真摯に向き合う内容が多くあります。特に印象的なのは九州管区記念大会の僧医・特派布教師・臨床宗教師の三師による講演会とパネルディスカッションです。大会当日は三師とも、自分の目の前の方に一対一で真摯に向き合うことが大切であるという結論を示されました。また、禅文化学林併催で開催された東京での大会と中国管区記念大会も印象的です。両大会では模擬葬儀を実施し、実際に自身が

最期を迎える時を想像して意見を交換しています。この取り組みにも、大多数の集合的な意見ではなく、最期を迎えるその「ひとりひとり」の気持ちや声に寄り添う大切さを考える意図を感じます。

個々の悩みにしっかりと耳を傾けること、僧侶が一方的に主張するのではなく、その人の「今」四苦八苦している声を聴くことが大切であるというのは、今や多くの僧侶の基本的な指針となっています。ここに、傾聴活動に目を向ける気運が生まれる予兆も感じることができます。

この周年事業に全力を投じた委員諸師の多くは、後に全曹青会長や事務局長などの要職に就き、人々と向き合う布教教化の方針を継続して推進していくこととなりました。各地の記念事業を通して全国の繋がりが深まったことは、後の電話相談事業の全国展開や災害時の行茶活動による傾聴ボランティアなどで、全国の加盟曹青会との協働を生む礎となりました。



北海道管区大会
 日時／平成16年10月18日
 場所／大休寺（北海道）
 主題／今、私達の生き方は、
 現場は…
 内容／講演会「八大人覺の大人の
 意義と背景」、グループワーク



九州管区大会
 日時／平成16年10月12日
 場所／大慈寺（熊本）
 主題／告知について考える
 内容／講演会「僧医という視座より」、対談講演「今後の青年僧侶
 がどのように活動するべきか」



東京大会・禅文化学林併催
 日時／平成16年3月11日～12日
 場所／青松寺（東京）
 主題／生老病死の大海を泳ぐ
 ～私がみつめ自らが行い
 自分の言葉で語る～
 内容／討論会「あなたならどう答
 えませんか?」、講演会「あなたの
 痛みや苦しみを私が受け止め、私
 にできることをいま」、模擬葬儀
 の実践、討論会「葬儀のモデルケ
 ースを通じて」



第27回中国管区曹青山口大会
 禅文化学林併催
 日時／平成16年11月24日～25日
 場所／山口グランドホテル
 多々良学園（山口）
 主題／「戒」に学び、生死を観る
 内容／講演会「和尚さんにも申
 す!」、講演会「命を伝えるという
 こと～一人ひとりの生死～」講演
 会「現代における『戒』の意味を
 考える」、養老孟司氏 模擬葬儀



近畿管区大会
 日時／平成16年11月11日
 場所／東大寺（奈良）
 主題／慈愛
 内容／東大寺大仏殿で世界平和祈
 念法要、講演会「ガンが病氣じゃ
 なくなったとき」



四国管区大会
 四国地区曹洞宗青年会
 創立20周年記念大会
 日時／平成16年10月19日
 場所／南海放送本町会館（愛媛）
 主題／脚下を照願する
 自己を見つめ直し、自らが
 行い自分の言葉で語る
 内容／討論会「あなたならどうこ
 たえますか」



東海管区大会
 日時／平成17年1月25日～26日
 場所／愛知専門尼僧堂・正法寺
 主題／初心～今の自分に喝!～
 内容／正法寺僧堂生活の実践、講
 演会「若い僧に言いたいこと」、
 実際の寺院へのクレームに対する
 討論会



東日本三管区合同
 全曹青30周年記念大会
 日時／平成16年12月14日
 場所／バルセイイざか
 ホテル聚楽（福島）
 主題／生老病死の大海を泳ぐ
 ～私がみつめ自らが行い
 自分の言葉で語る～
 内容／各曹青会展示ブース及び全
 体発表会、講演会「トランスパー
 ソナルな生き方について」、シン
 ポジウム「寺院の可能性と私たち
 が積極的に取り組んでいけるこ
 と」

第16期会長 宮寺守正 老師



創

立30周年記念事業・発会以来の会則改正という、大きな事業を終えて迎えた第16期は、今一度、初心に帰り、足元を見つめ直す期であったように思う。特に各県曹青会が力をつけ、全曹青未加盟団体がある中、スローガンを『つながれ 青年僧の 熱い思い』として、全曹青として何かを打ち上げるのではなく、連絡協議の場として情報共有を図り、各県曹青会からも必ず出向者を迎え、会務に参画していただいた。そのため、委員会総会時は会議室の外にまであふれ、その熱量を感じた。

また、賛否もあったが、疎遠になっていた全日仏青との関係を修復し、他宗派との交流の中で宗教間の問題の共有を行い、曹洞宗青年会の在り方を見つめ直した。特に第7期に執り行われ継承されていた千僧法要への本格的な参加、加盟団体の本山・本庁などでの会

議へも、執行部より積極的に参加した。

会務運営は前期より受け継いだ「活動資金は自助努力で集める」という理念によって行われた。各委員会での頒布品の作成などは現在も引継がれ、『そうせい』の中に同封されているチラシを拝見すると、当時のことを思い返し嬉しくもある。そして、近年多発する自然災害へのボランティア活動も、宗門内だけではなく行政や社協との繋がりをもち、青年宗侶として社会に存在を認めてもらえたのは、大きな成果であったと思う。

第16期末の3月25日、能登半島を襲った地震が50周年を迎える今期に再び能登の地を襲った。何ともやるせない気持ちになると同時に、今後の青年宗侶の在り方、発会当初の『大衆教化の接点を求めて』とされた諸先輩達の想いを、今一度考えてほしいと願う。

第17期会長 芳村元悟 老師



第

14期慕古事業、第15期30周年事業、第16期会則改正という激動の後を受けて、「いつもの全曹青」としてスタートした第17期は、『SMILE つながれ笑顔』をスローガンに、全国から「何か」を求めて集った仲間と活動しました。

激甚災害の発生に伴う支援活動への取り組みを、どのようにするのか第17期でも大きなテーマとなりました。平成19年2月には能登半島地震、7月には新潟県中越沖地震と、躊躇する暇を許さない状況が訪れ、執行部内で思案し各地域の評議員諸師にご協力を仰ぎつつ、いつでも何処でも支援できるネットワークの構築を目指しました。

執行部役員や委員会が交互に被災地に入り、災害支援対策本部設置へ向けての準備や行茶活動を行いました。1人のスパーマンに依存するのではなく、みんなで情報共有し、各地域の曹青会協力の下に切れ目ない支援を可能にす

る連絡協議の役目を担う全曹青となるために、ボランティアガイドラインを瀬田ボランティア委員長が渾身の作業として残しました。

また、会員相互の親睦を進めることで様々な垣根を取り払うきっかけとなるべく、初の試みとして地方総会を札幌市中央寺様で開催もいたしました。

全日本仏教青年会主催の千僧法要と「禅文化学林」のコラボレーションも、互いの関係・理解を深めていく大切な機会となりました。全国曹洞宗青年会に関わることで、様々な地域や人、文化に触れることができ、それを地元の活動にフィードバックしていただくことで加盟青年会はもとより、青年僧侶の活動に起爆剤になるような活動を目指した2年間でした。

災害や事故は絶えることなく、曹青会の活動も数多に及んでいきます。その活動が青年宗侶にとって、笑顔を繋ぐものであり続けることを願って、50年の節目の言葉とさせていただきます。

第18期会長 久間泰弘 老師



全

曹青創立50周年、誠におめでとうございます。時代の

要請によって当時の諸先輩方の情熱・努力・誠意と、宗門の協力に

よって会設立に至り、その後は『大衆教化の接点を求めて』のスロー

ガンのもと、衆生の悼みに寄り添ってきました。その長い歴史の

一期を多くの有意の同志と共にできたことは、私自身にとって、か

げがえのない時間でした。

第18期の『いのちの声に耳を澄ます』のスローガンのもとに基幹

事業とした電話相談事業には、『大衆教化の接点』を全国の仲間と共

に模索したいとの私の願いを込めました。また、各委員会の集約と

災害復興支援部の設置などの組織改編や、団体会費の改定(団体枠

の解消)など、出向者の絶大なる力量と、各管区理事・各評議員の

ご協力が無ければ成し得なかったことばかりで、今あらためて心か

らの感謝と敬意を表します。

私達宗侶・禅僧の命題は、自己省察に取り組むこと。自己を振り

返るとは何者を振り返ることになるのか。当期の所信では道元禪師のお言葉を胸に刻みました。

「おほよそ学仏祖道は、一法一儀を参学するより、すなはち為他の

志気を衝天せしむるなり。しかあるによりて、自他を脱落するなり。

さらに自己を参徹すれば、さきより参徹他己なり。よく他己を参徹

すれば、参徹自己なり。この仏儀は、たとひ生知というとも、師承

にあらざれば体達すべからず」

「自己」を体達し、他己を体達する、仏祖の大道なり。ただまさに自初

心の参学をめぐらして、他初心の参学を同参すべし」(『正法眼蔵』

「自証三昧」)

全曹青での先達の教えとは、時代がどのように変化しようとも

「大衆教化の接点」だといえるでしょう。同時に「参学同参」が全曹

青の無限の可能性だと信じます。全曹青、各曹青会各位におかれま

しては、今後も慈悲の反射神経を十分に発揮され、益々ご発展され

ますことを祈念いたします。

第19期会長 松岡広也 老師



第

19期の執行部一同が曹洞宗檀信徒会館に集まり、最初の準備会を開催したのが平成23年

3月11日午後2時、東日本大震災の発災直前でした。地震発生後、

被害の状況が分からず、移動することもままならなかったため、中

断しながらも慎重に会議を続けました。まさに、東日本大震災と

ともにスタートした第19期でした。

その後、『今が明日への新たな一歩』をスローガンに掲げ、会員諸

師や宗門内外の様々な組織と連携して、執行部も各委員会も復

興支援活動に邁進しました。把握しているだけでも2年間で延べ約

4000人もの各曹青会員が、東日本大震災及び各地で頻発した災

害の現地活動に参加しました。一人一人が被災地の厳しい現実と向

き合いながら同行を実践したことが、結果として全曹青の連絡協

議体としての組織力を最大限発揮することに繋がったと感じます。

全日仏青執行特別委員会では、村山博雅師が全日本仏教青年会の

理事長だけでなく、世界仏教徒青年連盟の副会長に就任されまし

た。宗派や国境を越えた諸活動に参画する機会を頂戴できたことも

組織として非常に有意義でした。各国では青年仏教徒の育成に対

し、日本よりはるかに積極的に取り組んでいることを痛感し、全曹

青に国際特別委員会を設置したことも転換点だったと感じます。

全曹青には特別な知識や経験がなくても、自由で創造的な活動を展開できる器がありました。それ

こそが全曹青の一番の魅力であるとは思っております。コロナ禍では、各仏教会が組織的に活動することは非常に難しかったです

が、その一方で、各地で多くの青年宗侶が個の力を発揮されたことには新たな希望を持ちました。こ

れからは個々のお力が活かされるようなさらに自由度の高い組織に発展していくのではないかと楽しみにいたしております。

第16期
▼▼▼

つながれ
青年僧の熱い思い

2005

- 防災ボランティアリーダー研修会(東京)
- 平成17年7月豪雨災害復興支援活動
- 広報誌タイトル改称(アルファベット表記)
- 「寺族の窓」広報誌連載開始
- 「アマンズそうせい」広報誌連載開始
- DVD『DIGIそうせい 祈祷太鼓の手引き』頒布
- 第22回禅文化学林「今、いのちを見つめる。こどもたちの未来のために」(岐阜)



2006

- 上座部仏教の坐禅法講習会開催(東京)
- 「仏法興隆花まつり千僧大般若法要」宮寺第16期会長導師
- 「防災寺子屋」開催(茨城)
- 第23回禅文化学林「災害と防災の現場から」(福岡)



2007

- 会則改編
- チベット仏教講習会開催(東京)
- 中央研修会「仏教のコミュニケーション力」



新潟県中越沖地震復興支援活動

- 第24回禅文化学林「いま、あえて生死を」(島根)
- 「お坊さんとふれあおう！」開催(愛知)
- 全日本仏教会 財団創立50周年事業参加

2008

- ボランティア委員会研修会開催
- 中央研修会「蝦夷錦～アイヌ文化の継承と発展～」
- 「仏法興隆花まつり千僧法要20周年記念法要」
- 傾聴研修会開催(ボランティア委員会研修会)
- DVD『DIGIそうせい 声明の手引き』頒布
- 全日仏青創立30周年記念「奈良千僧法要」(第25回禅文化学林)
- 「WFBY世界仏教徒青年会議」日本大会参加

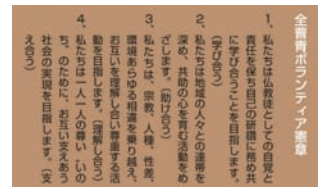


第17期
▼▼▼

つながれ
SMILE

2009

- 第26回禅文化学林「伝承～伝えること、築くこと」(奈良)
- 声明講習会開催(東京)
- 「全曹青ボランティアガイドライン」作成
- 「全曹青ボランティア憲章」制定
- 中央研修会「いのちの心に耳を澄ます」



【第16期】
会長・宮寺守正老師
埼玉県／金沢寺

研修会の充実
以前より広報誌連載で上座部仏教等の海外仏教の紹介を継続してきたことを受け、第16期ではその実践となる研修会を全2回開催。瞑想法や僧院生活を体験した。

DVD研修資料の充実
第15期より始まったDVD研修資料の制作を継続。第16期には『祈祷太鼓の手引き』、第17期には『声明の手引き』を制作した。祈祷太鼓の打ち方や声明の基本から丁寧に解説し、文字だけでは伝わりにくい音の要素を映像とともに学ぶ研修資料となった。

【第17期】
会長・芳村元悟老師
北海道／興禅寺

ボランティア憲章の制定
ボランティア活動の中心が担当委員になる場合が多くあったことを受け、より多くの参加を目標として憲章を制定。青年僧侶それぞれに得意不得意はあるが、同じ精神性を共有したそれぞれの活動を奨励。全曹青ボランティア活動の基盤となった。

千僧法要20周年記念法要
第7期に復活した千僧法要が20周年を迎えた。記念法要として4月に東大寺で開催。続く11月にも、全日仏青創立30周年記念「奈良千僧法要」として開催し、全曹青禅文化学林併催の大事業となった。

Action 主な活動・事業

第18期

いのちの
声を
澄ます



第19期

今が明日への
新たな一歩



災害復興支援部設立

2009

中国・九州北部豪雨復興支援活動
電話相談員養成基礎研修会【四国管区】(愛媛)

2010

神戸青年仏教徒会「阪神・淡路大震災15周年慰霊法要」随喜
『ZENSOUSEI ONLINE SHOP』開設

『写経用紙』頒布
『ECOポットー地球の声に耳を澄ます』頒布
電話相談員養成基礎研修会【中国管区】(岡山)
電話相談員養成基礎研修会【北信越管区】(石川)
電話相談員養成基礎研修会【関東管区】(東京)
電話相談員養成基礎研修会【近畿管区】(京都)
電話相談員養成基礎研修会【東海管区】(静岡)
電話相談員養成基礎研修会【北海道管区】
電話相談員養成基礎研修会【東北管区】(宮城)
電話相談員養成基礎研修会【九州管区】(福岡)

「仏法興隆花まつり千僧大般若法要」久間第18期会長導師
中央研修会「観世ふおんに届いた声」
第27回禅文化学林「光明～輝を求めて～」(静岡)
電話相談員養成発展研修会(東京・京都)
電話相談員養成基礎研修 補講(東京)

2011

DVD『DIGIそうせい 出班焼香法』頒布
東日本大震災発災 復興支援活動開始
中央研修会「洞上僧堂清規行法鈔」
「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜

国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」参加(福島)・・・
『全曹青公式YouTubeチャンネル』開設・事業紹介動画公開
「こども自然ふれあい広場」(福島)
『全曹青Facebookページ』開設

2012

阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
東日本大震災慰霊法要(各被災地域)
第28回禅文化学林「東日本大震災慰霊・復興祈願法要」(福島県成林寺)
「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
中央研修会「青年僧侶による災害復興支援」
「WFBY世界仏教徒青年会議」参加(韓国)
「こども自然ふれあい広場」(秋田・愛媛・山口)
YouTube読経動画制作
DVD『DIGIそうせい 華燭之典・仏前結婚式の手引き』制作(第20期頒布)
被災地にアートベンチ寄贈(金石市)
「WFBY40周年記念式典」参加(台湾)

2013

阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
東日本大震災三回忌慰霊行事(全曹青主管)
「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
『鎮魂の光珠』頒布
中央研修会「災害を振り返り明日へ」

「YouTubeチャンネル」開設
DIGIそうせいの紹介動画から、般若心経等の読経動画も公開。特に「般若心経」の読経動画は2024年時点で480万回以上再生され、現在も多くの方に日々親しまれる動画となった。

「WFBY世界仏教徒青年会議」参加
「WFBY40周年記念式典」参加
全曹青から世界仏教徒青年連盟(WFBY)や全日仏青の役員を多数輩出。事業にも積極的に参加した。

【第19期】
会長・松岡広也老師
静岡県／光明寺

千僧大般若法要
宮寺守正老師(全曹青第16期会長)が全日仏青理事長に就任し、曹洞宗の大般若会儀則による千僧法要が厳修された。久間第18期会長が導師を勤め、法要終了後には花の種を一般配布した。

災害復興支援部の設立
全曹青全員が所属することで、多発する自然災害への即時対応力を向上させた。またボランティア研究部会から続くノウハンを活かし、研修会の開催や青年僧侶による復興支援活動の調整も担う仕組みが確立された。

【第18期】
会長・久間泰弘老師
福島県／成林寺

2013

- 復興支援室分室が福島県に開設
- 「全曹青の足跡を訪ねて」連載開始
- 「納経塔」設置(福島県成林寺)
- 「活動の灯」設置(宮城県自照院、岩手県龍泉寺)
- 写経プロジェクト「願いをひとつに～写経に想いをのせて～」開始
- 創立40周年記念 精進料理教室「味来食堂～僧食を学ぼう～」プレ開催(東京)
- 「こども自然ふれあい広場」(秋田・長野・愛媛)
- 国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」(福島)
- 創立40周年記念 傾聴研修会(福岡)
- 年末鍋行茶(福島)
- 公式HP『般若』リニューアル



2014

- 「Inter Faith 駅伝」参加(京都)
- 東日本大震災慰霊速夜法要「綴る願い、重ねる祈り～繋がる想いが未来を拓く」(福島)
- 東日本大震災慰霊復興祈願法要・行脚(被災各県)
- 「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
- 創立40周年記念式典・シンポジウム開催(第29回禅文化学林併催)
- 創立40周年記念 傾聴研修会(福島)
- 豪雨・台風災害復興支援活動
- 「こども自然ふれあい広場」(青森・長野・高知・熊本)
- 「大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌記念 峨山道ウォークツアー」参加
- 創立40周年記念 「味来食堂～僧食を学ぼう～」開催(年度内5回開催)
- 創立40周年記念 傾聴研修会(静岡)
- 年末鍋行茶(福島)

2015

- 「阪神・淡路大震災20年慰霊法要」随喜
- 「Inter Faith 駅伝」参加(京都)
- 創立40周年記念 「全国徒弟研修会 with 国際子ども禅のつどい」開催
- 東日本大震災慰霊復興祈願法要
- 第30回禅文化学林「生きるとは？なぜ生まれた？」(四国)
- 創立40周年記念誌『40+』(ヨンマルプラス)発行
- 創立40周年記念 傾聴研修会(北海道)
- 中央研修会「プラム・ヴィレッジの高僧30名vs日本の青年僧100名対話会」



中央研修会「プラム・ヴィレッジの高僧30名vs日本の青年僧100名対話会」
ヨーロッパ圏最大規模の僧侶共同体であるプラム・ヴィレッジより、テイク・ナット・ハン師(タイ)の指導を受けた30人の高僧が来日。マインドフルネスの体験を通じ、青年僧侶と意見を交わす研修会を開催。食べる瞑想、やくつろぎの瞑想等を実践し、対話の時間も設けられるなど、密度の高い研修会となった。

「Inter Faith 駅伝」参加
京都マラソンの併催イベントとして、世界平和と東日本大震災の復興を祈願し開催された。タスキを通して願いを繋ぐため、多くの宗教者と共に全曹青も参加した。

曹洞宗東日本大震災災害対策本部復興支援室分室
福島県伊達市成林寺内から全曹青災害復興支援現地活動本部の機能を移管。主事として久間第18期会長が就任し、全曹青災害復興支援部からも書記として複数名が所属した。

【第20期】
会長・櫻井尚孝老師
静岡県／栄林寺



第18期基幹事業

電話相談員養成から「観世ふおん」開設へ

第

18期基幹事業では、現代の社会要請に応える僧侶の具体的な行動の一つとして、電話相談事業が展開されました。「電話相談員の養成」と「電話相談室の開設運営」という二つの活動を柱とし、全国から多くの青年僧侶が参加する大事業となりました。

相談員の養成は、基礎研修講座と発展研修講座の2段階で行われました。全国9管区で開催された基礎研修講座では、傾聴の基本を学び、グループワークを通して電話相談員としての技能も学びます。特に各地域の有識者を講師として招き、実行委員会と共に講義を進めました。これは、講座修了者が地元で活動する際に連携できる有識者と、研修時に縁を結んでおくためです。

開催時にはどの会場でも熱心な質問や意見が多数交わされ、その熱量に主催側である全曹青出向者も多くの刺激を受けました。また日程の都合が合わなかった方への補講も開催されました。続く発展研修講座は東京と京都の2ヶ所で開催し、基礎講座修了者の中から約200人が受講しました。相

談員として必要なトラブル対応等の知識や、より具体的な事例を使つてのグループワーク等を通して、実践的な技能を習得する場となりました。

こうした研修会の展開と並行し、電話相談室の開設でも多くの成果が生まれました。「観世ふおん」という名前でも毎週日曜22時から24時まで開設されたこの窓口には、平成21年11月の開設から平成23年5月までに100件もの着信がありました。実行委員が携帯電話を郵送し合い持ち回りで相談員として活動し、相談として寄せられたお話への応対内容に後日委員全員で意見を寄せ合い、受け手としてのレベルアップも促進されていきました。この電話相談窓口は期の終了後も継続し、平成31年には一般社団法人「観世ふおん電話相談」となりました。現在も当時の実行委員に加え、新しく参加したメンバーと共に日々活動が続いています。

本事業が展開された当時、今日の僧侶に浸透している「傾聴」という言葉はまだ普及しきっていませんでした。そんな中、心の寄り添いを実践する具体

的な行動の一つである電話相談に、全国から多くの青年僧侶が向き合いました。そして、第18期の最後に発災した東日本大震災に対しては、研修会を修了した多くの青年僧侶が傾聴者として被災地に入りました。僧侶による災害復興支援の新しい在り方が見出されていくことにも繋がり、次代の僧侶へも多大な影響を残す事業となりました。





東日本大震災復興支援活動 全曹青の総力で向き合った被災地支援

初動

全曹青は発災即日に災害メーリングリストを立ち上げました。被災地の曹青会や会員から被害や刻々と変化する状況が多く寄せられ、また支援情報や活動報告を詳細に発信しました。

現地では福島県成林寺（久間第18期会長師寮寺）に「全国曹洞宗青年会災害復興支援現地本部」を立ち上げ、岩手県龍泉寺、宮城県自照院も活動拠点とさせていただきました。現地活動は平成23年3月17日より開始され、平成25年4月30日時点までに4000人以上の青年僧侶が活動しました。

炊き出し活動

発災直後から、避難所や仮設住宅等での炊き出し支援を行いました。食糧難の解消への一助となることはもちろん、そこで生まれる現地の方との会話も重視しながら実施しました。

平成24年10月までに約4000人の青年僧侶が活動にあたり、5000食以上を提供しました。仮設住宅での生活が基本となつて以降も、年末に鍋行茶として食事とともに交流の時間を過ごす等、傾聴との複合的な活動へと発展しました。

寺院復旧、一般ボランティア等

寺院境内や墓地の土砂撤去には始まり、仮設住宅の設置場所を確保するための作業等、様々な活動に取り組みました。特に東日本大震災では放射線被害への不安の声が多くありました。公的な除染地区からは外れているが放射線量が多い地域において、会員有志による除染活動を行いました。

行茶（傾聴）活動

被災地で我々僧侶にこそできる活動として、行茶活動を実践しました。避難所や仮設住宅に伺い、一緒にお茶を飲み現地の声にひたすらに耳を傾け寄り添います。延べ2000人以上の青年僧侶が活動にあたり、会話による心のケアと、その中で聞き取ることできた声を行政や社会福祉協議会等に届けることができました。

被災地の中には報道の対象とならず、ボランティアが少なかった地域もありました。継続して広範囲で行う傾聴活動は特に重視され、曹洞宗のボランティア活動として広く社会に認知されました。



災害ストックヤード設置

災害への備えとしてストックヤードの整備を行いました。寺院施設やネットワークを社会資源として活用し、いのちを繋ぐ迅速な救援活動への一助となることを主目的としています。また平時には、備蓄品などの点検を兼ねた催しなどに活用することにより、地域の防災力への啓発や減災への一助となることも目指しています。

ストックヤードには、炊き出しステーションとともに100人分または50人分の72時間分の水・アルファ米・缶詰・非常用トイレなどが備蓄されています。第20期に最初の5ヶ所を設置し第22期に10ヶ所を追加、全管区に配備されています。

こども自然ふれあい広場

平成23年8月、第1回開催では曹洞宗福島県青年会と全国青少年教化協議会に協力いただき、被災体験を持つ子ども達の心身ケアや保護者のストレス軽減にも寄与することを目的とした短期保養プログラムを開始しました。第2回開催より全国の加盟曹青会主催事業として継続し、毎年夏季に各開催県に被災地の子ども達を招待し、様々な交流や体験企画などを実施しました。やがて復興支援室分室が主管となり、

9年間で延べ約24ヶ所、約9000人の子ども達が参加しました。

慰霊・復興祈願法要、関連事業

活動拠点となった寺院や関係諸団体と協働し、発災翌年より毎年慰霊・復興祈願法要や様々な関連事業を展開しています。特に七回忌や十三回忌には日中の法要だけでなく、連夜法要や演劇の披露、鎮魂の花火を打ち上げる等、様々な事業を展開してまいりました。

平成25年には全日仏青主催の追悼慰霊復興祈願法要・復興イベントの祭壇に「納経塔」がお祀りされ、その後、災害復興支援現地本部であった福島県成林寺の境内に建立しました。また活動拠点となった宮城県自照院と岩手県龍泉寺に、記念碑「活動の灯」が建てられました。

現在も毎年3月10日には、全日仏青とWFBYとの共催事業として納経塔での「東日本大震災慰霊・復興祈願法要」を厳修し、写経プロジェクト「願いをひとつに」写経に想いをのせて」にお寄せいただいた写経を奉納しています。翌日3月11日には「活動の灯」で法要を勤め、被災各県で営まれる慰霊復興祈願行事へも参加しています。全国からの祈りを届けるとともに、震災の記憶の風化を防ぎ、当時の活動への弛まぬ想いを次世代へと伝えています。



創立 40 周年記念事業

「全国徒弟研修会」・「傾聴研修会」・「味来食堂」 大衆教化の接点を具現化して未来へ

創立40周年記念事業は、第20期スローガン『繋がる想いが未来を拓く』のもと、先輩諸師から託されてきた『大衆教化の接点を求めて』という強い想いを未来へ繋げるべく企画されました。本記念事業は三つの事業を軸とし、「全国徒弟研修会with国際子ども禅のつどい」未来へ向けての大きいなる足音、「傾聴研修会」、「味来食堂」僧食を学ぼう」を展開しました。

全国徒弟研修会with国際子ども禅のつどい未来へ向けての大きいなる足音

一一 祖峨山韶碩禪師六百五十回大遠忌という大きな節目にあたる大本山總持寺を会場に、2泊3日で開催された徒弟研修会です。青少年教化を目的とし、全国各地から寺院徒弟が参加しました。さらにWFBY世界仏教徒青年連盟の国際仏教徒青年交換プログラム（IBYE）を併催し、世界8ヶ国の青年仏教徒達も参加しました。
2泊3日の日程は暁天坐禅にはじまり、朝課や回廊清掃、飯台そして



夜坐まで、基本的な修行生活を行いながら様々な企画が盛り込まれました。ウォークラリーや記念植樹、震災慰霊法要、大遠忌法要等、大本山總持寺の多大なるご協力を得ながら大変貴重なつと大なるプログラムでした。祖師方より脈々と相承されてきた想いが、この研修会を通して参加した子ども達にとって良い思い出とともに残り、将来その思い出が自身の大切なものとして実を結ぶよう願われる研修会となりました。

傾聴研修会

第18期基幹事業委員会を経て第20期に構成された「観世ふおん」特別委員会との連携事業です。傾聴の原理原則を再度学び直すとともに、これまで全曹青が「電話相談」や「行茶ボランティア」で培ってきた傾聴に対する姿勢やその手段を、皆で捉え直すことを目的としています。

全国4ヶ所において、それぞれ1泊2日で研修会が行われました。導入として傾聴の基礎からステップアップし、最後にはホスピスをテーマにした研修のカリキュラムを「観世ふおん」特別委員会がプログラムしました。この研修会から傾聴のノウハウを学ぶだけでなく、傾聴活動が僧侶の大切な活動

の一つとなり、単に話を聞くだけでなく「僧侶として寄り添うことができるか」を考えるきっかけとなる研修会となりました。

味来食堂く僧食を学ぼうく

期を通して継続開催した精進料理教室です。参加者に対し丁寧に実演解説

を行い、素材の本質を感じることとそれを余すことなく頂くという、「精進」の本質を体験していただきました。

特に本事業では、これまで行われてきたお寺での精進料理教室と比較し、若い世代が参加しやすくなる工夫を凝らしました。まず参加へのハードルを下げるべく都内の明るい雰囲気のお店を会場とし、開催時刻も仕事終わりに



参加しやすい18時や19時台の時間帯としました。

また、精進料理を身近なものと感じていただけるよう開催の様子を積極的にSNSで発信し、多くの若い世代に興味を持っていただくことができました。布教化活動を行う上で「精進料理」が非常に大きな役割を担うことを改めて認識するとともに、まさしく受け継がれてきたテーマ『大衆教化の接点を求めて』を具現化した事業として、現在も全曹青の継続事業となっています。

本記念事業では、若者や子ども達という次世代を担う存在への働きかけとなる事業を多く展開しました。過去の活動や思いが世代を超えて繋がっている全曹青において、まさに未来を拓く記念事業となりました。

第20期会長 櫻井尚孝 老師

『繫

「繋がる」の想いが未来を拓く^{ひら}スローガンに掲げ、第20期を務めました。

当期は創立40周年にあたり、会長予定者段階より組閣はもとより委員会構成や人事も含め周年事業をすべての軸に考え進めました。さらには会議の効率化を図るためペーパーレス化も実施。議題が多岐にわたり、密な情報共有が求められる中で即時性を発揮するために取り組み、定着させることができたのは大きな成果でした。

当然周年事業だけに傾倒はできないため、通常行われていた連絡協議体としての活動も並行しながらでした。各地において開催される管区大会への参加・協力や他宗派との連携活動、WFBYを通じての国際的な活動と様々な経験をさせていただきました。

就任時の委員会総会の挨拶で「全国曹洞宗青年会が大好きです」と述べました。振り返ってみる



と当時はかなり過密な日程をこなしておりましたが、一切負の感情はなく、非常に充実して有意義な日々を過ごしておりました。まさに「好き」だったからこそ夢中になったし、頑張れたのだと思っております。

青年会活動を通じて得たことは非常に多くのものがあります。様々な経験や多くの人々との出会いなど普通に過ごしていれば味わえなかったものです。ご縁を頂いた老師より「青年僧は失敗が許される世代である。恐れることなく活動しなさい」と頂いた言葉は、困難に挫けそうになった時や悩んだ時に自身を奮い立たせてもらいました。一生懸命に行動すれば必ず得るものがあります。結びに、未来を担う青年僧達が進歩を止めることなく只管に努力を怠らず、『大衆教化の接点を求めて』の言葉を胸に邁進してください。祈念いたします。

第21期会長 安達瑞樹 老師

私

が会長の任をお預かりしたのは東日本大震災発災から5年の月日が経過した時でした。復興も道半ばであり、津波の被害のみならず東京電力福島第一原子力発電所の事故により、多くの方々が不自由な生活を強いられていました。その後も熊本地震や九州北部豪雨と災害は続き、加盟曹青会の皆様、地元行政の方、各ボランティア団体、そして曹洞宗災害復興支援室と協働し、困難に立ち向かう人々に僧侶として何ができるのかを共に考える日々でした。第21期スローガンを『笑顔の君とおなじ空を見上げて』とさせていたいただいたのは、その思いがあったからです。

全曹青は災害支援に傾倒しすぎではないかとのご意見もありましたが、大衆教化の接点を求めて活動する私達は人々に寄り添うたびに、自己の研鑽につなげ、その経験を糧に様々な事業を展開しました。福島市で仮設住宅をはじめ近



隣の方々と全国の青年僧侶が共に祈る「東日本大震災七回忌法要」では、各青年会にブースを設置いただき、交流を通して悩みや願いを共有しました。大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師650回大遠忌に併せて開催した「精進料理FEST A」では、炊き出しや行茶活動の経験を活かし、各地の郷土を反映した食事を通して、相承の想いを参加者と考えました。いのちの声を耳を澄ます「観世ふおん電話相談」では、被災地での行茶活動において感じたことを振り返り、私達ができる明日に繋がることを学んでまいりました。

全曹青は安居した僧堂、僧侶になった境遇、学歴が違えども同じ思いを持って実践を重ね、研鑽を積み重ねることができる場であると思います。その思いは宗派や人種、性別を越える。学ばせていただいたことは私の貴重な財産であり、いまに繋がっています。多くの方々とのご縁に感謝申し上げます。

第22期会長 倉島隆行 老師



『**禅**』を世界へ、そして未来へ』をスローガンに掲げ、2018年に日本で開催された世界仏教徒連盟(WFB)と世界仏教徒青年連盟(WFBY)世界大会の開催円成に向けて邁進しました。法要、並びにイベント会場が大本山總持寺であったことから、曹洞宗としても各団体との調整を図り、「日本仏教の魅力」を世界へ発信する必要がありました。当時、全曹青会長と全日本仏教青年会第21代理事長を兼任させていただいていた私は、その魅力が和合の心にあると考え、宗派・宗教を超えて調和できる日本の精神性について神道青年全国協議会と協働するなど、現代社会における「慈悲の行動」をテーマに展示を企画し、祈りの実践を通じて海外参加者へ日本仏教の魅力を紹介しました。

こうして開催された世界大会では、多発する自然災害に対して日本仏教界が取り組むボランティア活動などが評価され、WFBY会長に村山博雅師が日本人として初めて選任されるなど、仏教青年会にとつて新たな一歩を踏み出した実りある大会となりました。会員一同で取り組んだ集大成は映画『典座―TENZO―』の製作ですが、この映画はSDGsに対する宗門の実現可能性を考えるための事業でした。私が全曹青へ参加した第17期ではジェンダー問題への意識が高まりつつありました。歴代広報委員が誌面編集する上で、尼僧や寺族といったテーマを真摯に議論する姿を見ていた私は、飯島恵道師に顧問を依頼することで会務運営に対して新たな示唆を得ることができました。歴代全曹青の自由で創造的な活動があつてこそ実現した事業であり、曹洞宗という大いなる母船から青年会へと伝わる慈悲を実感しました。全曹青の活動に対してご理解とご協力をいただきました皆様へ御礼申し上げます。

第23期会長 原知昭 老師



第23期は、『今を創ろう 明日を咲かそう』をスローガンとし、過疎問題を基幹事業に据えてスタートしました。各事業において、それぞれの委員会をはじめとした各役職が遺憾なく力を発揮していきましました。しかしながら、1年目が終わる間近になり、日本そして世界を揺るがす大きなことが起きました。

新型コロナウイルス感染症ですべてが大きく変わりました。人々はステイホームを余儀なくされ、何が正しい情報なのかわからないまま不安な日々を過ごしました。当然ながら全国曹洞宗青年会の活動にも大きな影響がありました。今までのように一堂に会しての会議はもちろん中止となり、様々な事業が縮小・中止となりました。すべてが初めての状況であり、思い通りにならない苛立ちの中、我々にできること今為すべきことを模索する日々が始まりました。会議においてはインターネットツールを活用してのウェブ会議を導入し、対面ができない状況での新たな会議形態を構築していきましました。各委員会においてもSNSや動画投稿サイトなどを活用して、人々のこころの安寧を求める事業を展開していきましました。決してすべてが満足のいく結果ではなかったかもしれませんが、全曹青らしく青年僧らしく時代に則した形で『大衆教化の接点を求めて』活動ができたと思います。全曹青50年の歴史の中においても、様々な困難にぶつかりそして智慧と情熱で乗り越えてこられた先輩達に敬意を表し、またこの先の困難をきつと乗り越えてくれる未来の青年僧侶に期待を込めて、そして共に困難な局面に立ち向かってくれた同志に感謝の気持ちを表し結びとします。

第24期会長 山田俊哉 老師



当

期発足時は3度目のコロナ緊急事態宣言が出され、社会への影響と混乱が最たる時期でした。オンラインでの定期総会や委員会総会と、出向者が顔を合わせないままでのスタートは不安で一杯でしたが、出向7期目の御恩の中、長らくIT担当だった私が会長となったことに使命を感じました。変化と変革の時だという自覚のもと、スローガンに『Paradigm Shift』を掲げ、新たな世界への挑戦をテーマに、暗闇をかき分けるように走り出しました。しかし早期収束の期待はいつまでも裏切られ、コロナが感染法上の五類に移行したのは退任定期総会の実に10日前のことでした。

全国連絡協議体の意義が失われかねない状況でしたが、全曹青だからできることを考え、出向者一同で精一杯頑張りました。整備されたIT環境や円熟した継続事業にも助けられ、結果として全曹青らしい魅力的な事業を実施できた

ことは、まさに自由に創造的な活動だったと誇りに思います。

各地方集會等で全曹青をお招きいただき、お会いした全国会員の笑顔から実感する同志としての絆は、コロナ禍の分断を経ても確かに繋がっていました。これこそが全曹青の歴史の賜物と感動しました。多数が中央で一堂に会する機会は得られませんでした。それは次期50周年事業として結実することとなります。

私達はコロナ禍という不可逆の大きな変革、パラダイムシフトを経験しました。社会の変化は明らかに加速度を増しています。僧侶にも更なる変化が求められることでしょう。しかし、青年会にはいつも同じ想いを持つ仲間がいます。歩みを受け継ぎ、共に大きな困難に立ち向かい、挑戦への情熱をもつことができます。後輩皆さんの未来に踏み出す新たなパラダイムシフトを期待し、心より応援しています。

第25期会長 田ノ口太悟



第

25期は全曹青が創立50周年を迎え、期を通して記念事業を盛大に開催することができました。また常設の各委員会活動も、非常に充実したものとなりました。これもご法愛をいただいた関係各位の皆様のご協力あつてのことです。ここに謹んで御礼を申し上げます。

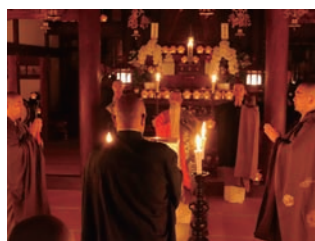
令和4年の夏頃から、創立50周年における行事案を考え始め、素案を考えるにあたって過去の広報誌を読み込みました。半世紀という歴史を紐解くと、そこには諸先輩方が一丸となって試行錯誤し、様々な活動に挑む姿が詳細に記されていました。

青年会の活動はすべて、青年僧侶同士の深い連携から生まれる力によって成されます。私自身もそんな大きな力に様々な成長の機会を頂戴する日々でした。私自身がそうでしたが、普段お寺でお檀家様に関わっていますと「いまの自分の教化活動で良いのだろうか」

と、一人では不安になることもあります。そんな中で、集まった青年僧侶の様々な発想や新しい視点に触れることができる青年会は、私にとって悩みに共に挑むエネルギーを貰える特別な場所でした。

第25期会長を拝命し事業の内容を充実したものにすることはもちろんのこと、特に願ったことがあります。それは先述のように「青年僧侶諸師にとって、青年会という場所が有益な『居場所』として機能してほしい。そのように思えるものになってほしい」ということです。この想いにお力添えをいただけたことで、各事業も結実したと考えております。

全曹青の活動は50周年を超えてさらに続き、青年僧侶の人生も続いていきます。全曹青、青年僧侶、それぞれにとって今期が「輝かしい居場所であって、良い意味での通過点」になる会務運営を目指し、任期終了までさらに努めてまいります。



2015

心の傾聴委員会設置
「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
ネパール地震災害支援活動
平成27年9月関東・東北豪雨災害復興支援活動
「こども自然ふれあい広場」(福島・高知)
大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師六百五十回大遠忌 献供諷經 会長焼香師(大本山總持寺)
第31回禅文化学林「精進料理FESTA in 總持寺」開催
第4回「つるみ夢ひろば in 總持寺」出展
年末鍋行茶(福島)
絵馬プロジェクト「絵馬に願いを込めて～子供たちの未来を拓く～」展開
「味来食堂～僧食を学ぼう～」継続事業化(年度内3回開催)

2016

阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
東日本大震災慰霊・復興祈願法要
傾聴研修会(滋賀)開催
「Inter Faith 駅伝」参加(京都)
「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
中央研修会「臨床宗教師の取り組み」
熊本地震復興支援活動
「こども自然ふれあい広場」(秋田・徳島)
第32回禅文化学林「支え合う」(兵庫)
台風10号被災地復興支援活動
「つるみ夢ひろば in 總持寺」出展
復興ロウソクプロジェクト「復興への灯火」展開
東日本大震災七回忌予修法要(大本山總持寺)
年末鍋行茶(福島)
「味来食堂～僧食を学ぼう～」(年度内7回開催)

2017

阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
スマホアプリ『アプリソウセイ』制作
東日本大震災七回忌 慰霊復興祈願のつどい(福島)
国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」参加(宮城)
傾聴研修会(広島)開催
「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
『僧侶の英会話』発行
中央研修会「現代に坐禅を普勧する」

アプリソウセイ
スマートフォン、タブレットの普及により、世間ではウェブページよりスマホアプリを活用する生活が浸透しつつあった。これを受け、青年会が活用できるアプリ「アプリソウセイ」を制作した。アプリでは公式HP「般若」の記事や広報誌を閲覧できる他、各種法要進退を確認できる法要公務帳を実装した。

熊本地震復興支援活動
震災を受け、長野県に設置されていた寺院防災ストックヤードの炊き出しステーションと備蓄品を現地に搬入した。熊本県曹洞宗青年会と協働し炊き出し活動にあたり、以降は九州曹洞宗青年会に引き継ぎ6月末まで活用された。

東日本大震災七回忌 慰霊復興祈願のつどい
第18期終盤より様々な復興支援活動を実施し、第21期には被災から七回忌を迎えることとなった。行茶活動や子ども達とのふれあい、法要を継続してきたことをふまえて、法要だけでなく演劇の披露や慰霊花火の打ち上げ等、多数の企画を展開した。

【第21期】
会長・安達瑞樹老師
兵庫県／長楽寺

- 2017 ● 熊本地震復興祈願法要・物故者供養法会随喜
- 『衡立型揭示額縁』頒布
 - 九州北部豪雨被災地支援活動
 - 秋田県豪雨被災地支援活動
 - 「こども自然ふれあい広場」(徳島・宮崎)
 - 「つるみ夢ひろば in 總持寺」出展
 - 映画『典座—TENZO—』製作開始
 - 『全曹青公式Instagram』開設
 - 「108人108回太陽礼拝×坐禅」開催(東京)
 - 「味来食堂～僧食を学ぼう～」(年度内6回開催)



- 2018 ● 阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
- 熊本地震復興祈願法要・物故者供養法会随喜
 - 東日本大震災慰霊・復興祈願法要
 - 30周年記念「仏法興隆花まつり千僧法要」倉島第22期会長(全日本)
 - 中央研修会「臨床宗教師特別委員会シンポジウム」
 - 「こども自然ふれあい広場」(秋田・愛媛)
 - アースデイ東京「Earth禅堂2018」出展
 - 寺院防災ストックヤード設置拡大
 - 『ナムナムぬりえ』頒布
 - 北海道胆振東部地震復興支援活動
 - WFBY世界仏教徒青年会議日本大会参加(大本山總持寺)第33回禅文化学林併催
 - 「つるみ夢ひろば in 總持寺」出展
 - 「108人108回太陽礼拝×坐禅」開催(東京)
 - 「味来食堂～僧食を学ぼう～」(年度内7回開催)



- 2019 ● 阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
- アースデイ東京「Earth禅堂2019」出展
 - 東日本大震災慰霊・復興祈願法要
 - 「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
 - 映画『典座—TENZO—』地方試写会開始
 - 映画『典座—TENZO—』カンヌ国際映画祭出品
 - 中央研修会「誰一人取り残さない。～未来の僧侶像を問う～」



頒布物制作
大型の額縁や衡立としても使える『衡立型揭示額縁』、お子さんが楽しみながら親しめる可愛らしいぬり絵『ナムナムぬりえ』を頒布。幅広い年代に向けた布教化の一助となる頒布物を充実させた。

臨床宗教師特別委員会シンポジウム第22期では宗教者の寄り添いについて参究するため、臨床宗教師特別委員会を設置。実際に臨床宗教師として活動している有識者をお招きし、シンポジウムを開催した。

【第22期】
会長・倉島隆行老師
三重県／四天王寺

WFBY世界仏教徒青年会議10年ぶりとなる世界仏教徒青年会議の日本開催に際し、大本山總持寺を会場に禅文化学林を併催した。「精進料理フリース」や「全日仏青加盟団体フリース」に出演し、映画『典座—TENZO—』に完成試写会も行われ、各種の仏教体験イベントとともに国際文化交流を行った。なお、全日本仏教青年会全国大会も併催された。



マレーシア仏教青年会国際交流 2019

- ダライ・ラマ14世より『典座—TENZO—』推薦メッセージ拝受
- 『典座—TENZO—』全国上映開始
- 『典座—TENZO—』国際映画祭進出
- 広報誌連載「過疎に向き合う」開始
- 「こども自然ふれあい広場」(愛知・愛媛・宮崎)
- 大本山總持寺石川素童禅師百回御遠忌随喜・「つるみ夢ひろば in 總持寺」出展
- 第34回禅文化学林「食縁」(島根)
- 過疎に関するスタディーツアー開催(島根)
- 福島県いわき市に暖房器具寄付
- 宗務庁災害相互協力協約を締結
- 全国ボランティアネットワーク「JVOAD」加盟
- 「味来食堂～僧食を学ぼう～」(年度内2回開催)

阪神・淡路大震災慰霊法要随喜 2020

- タイ・バンコク禅研修 現地坐禅指導
- シンポジウム「災害のこれから～共に学び、新しい未来をつくる～」開催(東京)
- 「おうちで坐禅してみよう」動画・パンフレット公開(多言語)
- 「おうちで写経のすすめ」動画・『消災呪』写経用紙・パンフレット公開(多言語)
- オンライン坐禅会開始(24期終了まで毎月開催)
- オンライン研修会「明日をひらく寺院創生講座」開催
- 映画『典座—TENZO—』DVD完成
- 「花まつり」在宅支援実施
- 『ASMR精進料理』YouTube動画シリーズ制作

オンライン研修会「災害に対してのこれからを考える」開催 2021

- オンライン研修会「震災と自死」開催(観世ふぉん電話相談室と協働)
- 東日本大震災慰霊・復興祈願オンライン法要
- 英訳版法要公務帳アプリ『SOTO ZEN ceremonies』作成
- 大本山總持寺開創700年 總持寺祖院へオリジナル御朱印謹呈
- 公式HP『般若』リニューアル
- 全国曹洞宗青年会 プロモーションアニメ動画
- オンライン中央研修会「20年後も住職の青年僧侶たちへ～今を創ろう 明日を咲かそう～」

暖房器具支援
令和元年東日本台風による被害を受けた福島県いわき市に暖房器具を寄付。災害復興支援活動の一環として、全国よりお寄せいただいた91台のストーブを寄付した。

「花まつり」在宅支援
新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令を受け、『花まつりセット』を活用した支援を行った。学校・幼稚園・保育園・学童などお子さんを預かる施設・介護施設、障害者支援施設、病院等を配布対象とし、社会情勢への不安の中に憩いの時間を届けた。

「過疎に関するスタディーツアー」
過疎問題への取り組みを基幹事業とし、全国でも過疎化が深刻とされている島根県で、現地視察のスタディーツアーを開催。他にも広報誌での過疎問題連載や研修会の開催等、期を通して取り組んだ。

【第23期】
会長・原知昭老師
島根県／宗見寺

2021

- JVOAD全国フォーラム(オンライン)登壇
- 熊本県球磨川流域豪雨災害支援 扇風機配布「風を贈ろう」実施
- 国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」参加(オンライン)
- 大本山總持寺開創700年慶讃法要 御向尊献湯諷經 会長焼香師(大本山總持寺祖院)
- 大本山總持寺開創700年奉讃 第35回禅文化学林「ZENSOUSEI ONLINE FESTA」
- 「こども自然ふれあい広場」感謝状拝受
- 災害復興支援活動オンライン研修会開催
- YouTubeチャンネル登録1万人突破



2022

- オンライン研修会「寺院のための情報発信支援講座」開催
- 東日本大震災慰霊・復興祈願オンライン法要
- 中央研修会「オンライン事業の実践」
- YouTube動画『仏教って何ですか』シリーズ制作
- SNS・YouTube動画『禅僧といっぶく』シリーズ展開
- ダウンロードイラスト素材拡充
- 熊本県球磨川流域豪雨災害三回忌法要随喜
- 大本山總持寺開創七百年延年之章 参加(大本山總持寺祖院)
- 静岡県台風災害復興支援活動
- YouTube読経動画『修證義』シリーズ制作
- YouTube動画『英語で親しむ梅花流』制作
- YouTube動画『世界平和 祈りの鐘』制作
- 研修会「ウクライナ現地報告会」開催(東京)



2023

- 阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
- 第36回禅文化学林「伝心 ～伝えるおmoi 伝わるおmoi～」(宮城)
- 広報誌第200号記念号発行・表紙AR動画
- HP『般若』英語ページの作成
- 『ZENSOUSEI ZEN CUSHION』頒布
- オンライン研修会「第2回寺院のための情報発信支援講座」開催
- 東日本大震災十三回忌慰霊・復興祈願法要
- 「味来食堂～僧食を学ぼう～」オンライン開催



【第24期】
会長・山田俊哉老師
秋田県／倫勝寺

東日本大震災十三回忌
慰霊・復興祈願法要
新型コロナウイルスの影響から
オンライン開催が続いていた
が、十三回忌では4年ぶりの現
地開催が実現し、国内外から
多くの人が参集した。また法要
と読経のライブ配信も実施
し、数年間のオンライン活動の
経験も活かされた。

『ZENSOUSEI
ZEN CUSHION』
アウトドアブランド・モンベル
と共同制作。寝袋入り坐蒲型
クッションというコンセプトが
災害時の備えの一つとしても注
目され、大きな反響が寄せられ
た。

国際仏教徒青年交換プログラム
「IBYE」
WFBY・全日仏青事業。全書
青役員が積極的に企画運営に関
わり、コロナ禍においてオンラ
イン開催での国際交流が実現し
た。

広報誌第200号記念号
増ページ記念特集として広報誌
の歴史と記事を取り上げ、表紙
をスマホカメラ越しに見ると歴
代広報誌の動画となって動き出
すARも導入された。



大本山總持寺二祖峨山韶碩禪師六百五十回大遠忌 精進料理FESTA in 總持寺 垣根を越えて同じ空を見上げた一日

大

本山二祖峨山韶碩禪師六百五十回大遠忌にあたる平成27年、大本山總持寺で開催された「鶴見のまちの大遠忌」に併せ、全曹青は「精進料理FESTA in 總持寺」を開催しました。仏殿前に赤毛氈を敷き机を並べ、精進料理の心に触れながら一緒に食事の時間を過ごすという事業です。

当日午前には「二祖峨山韶碩禪師献供諷經」に随喜し、全曹青として初めて、安達第21期会長が焼香師の大役を頂戴することとなりました。大祖堂には加盟曹青会員含め随喜衆70人、700人以上の方が参列されました。第21期スローガン『笑顔の君と おなじ空を見上げて』を意図した香語のもと、大衆一如の厳肅な空気に満たされた法要となりました。

法要後11時から、「精進料理FESTA in 總持寺」が開始されました。開始前からすでに長蛇の列ができており、すぐに入場券がわりのお盆を配布し、各ブースで食べたい料理を手にとっていただきました。メニューは中国管区の「とろろ焼き」、四国管区の「ハーブ塩うどん」、兵庫県第二宗務所青年会の「黒枝豆とトウモロコシのかき揚げ」、九州管区より「豆乳プリン」、東海管区より「禅パスタ」（冬瓜と豆乳のクリームパスタ風）、東北管区からは「おくず

かけ」。それぞれ各管区・曹青会の風土を活かした食材で作られたものでした。「相承」を伝えるという意図から使い捨ての食器は使用せず、長野県龍光寺からお借りした食器を用い、これら6品を500食ずつ無料で提供しました。

食事作法と『五観の偈』の教えを説明し唱和、来場者と青年僧が対話しながら食事をいただきました。本事業には、行茶活動の経験や炊き出し活動のノウハウも活かされています。ただ食事を提供するという事業ではなく、そこにいる全員で心のこもった料理を頂く時間を大切にし、生まれる会話や温かい心の動きを共有することができました。事前に2000人の参加を見込んでいましたが、14時半にはすべての食事配布が終了しました。しかし来場者は止まず、急遽「さつまいものレモン煮」などの配布が行われる等、大盛況のもと終了しました。

当事業は第20期時から大本山總持寺にお願いし、全曹青OBの先輩諸師にもご協力いただくことで実現したものでした。また当時告知には地元鶴見区商店街の方々にもご協力いただき等、まさに僧俗の垣根なく、皆でおなじ空を見上げる一丸の事業となりました。





映画『典座—TENZO—』 青年僧侶の人的苦悩を銀幕に描く

第

22期には、全曹青としてこれまでにない事業である映画製作事業が展開されました。映画界で活躍されている富田克也氏に監督を依頼し、撮影と編集制作は映像制作集団「空族」に委託、全曹青が映画界のプロと共にシナリオから作品を練り上げ、キャストとして出演して生まれたのが、この映画『典座—TENZO—』です。

本作は、2人の青年僧侶を軸にストーリーが展開します。1人は家族と共にお寺を護り、意欲的に活動しながらも自信が持てない僧侶。もう1人は東日本大震災の津波で自坊も家族も地域の繋がりが流され、土木業に就いて仮設住宅に住む僧侶。それぞれ違う立場から生まれる苦悩を胸に、物語は『典座教訓』に説かれている「生命との向き合い」という概念へと繋がっていきます。

事業開始当初は精進料理を主軸とし

た15分のショートムービーを制作する計画でしたが、愛知専門尼僧堂 青山俊董堂頭老師との対談を経て、根本的な部分から作品の方向性を考え直しました。『典座教訓』が料理の中に生命すべてと向き合う姿勢を説いたことを重視し、現代社会で生命と向き合う青年僧侶を描く映画となりました。

撮影は大本山永平寺、大本山總持寺、長野県無量寺、山梨県耕雲院、中国天童寺での撮影を主としつつ、曹洞宗福島県青年会と復興支援室分室をはじめ各位の多大な協力の下、福島市円通寺や福島県新地町仮設住宅での撮影も行われました。監督である富田克也氏は、映画の舞台となるコミュニティで実際に生活する人達へ取材を綿密に行い、俳優よりも現地の人物をキャストイングするスタイルの監督として有名な方でした。本作でもそのスタイルが活き、全曹青会員や青山老師が出演者となり、本物の僧侶が本物の苦悩に向き合うドキュメンタリーをフィクションに差し込んだ映画が生まれました。これが海外メディアから高く評価されることに繋がり、数々の国際賞や映画祭の招待へと繋がっていきました。

完成試写会は平成30年11月に大本山總持寺で開催された「世界仏教徒青年会議」併催の禅文化学林で行われ、ご協力いただいた関係各所でも順次行われました。その最中、カンヌ国際映画



・撮影の様子(福島)



・映画『典座—TENZO—』作中より

祭「批評家週間・特別招待部門」への正式出品の招待をいただきました。カンヌ国際映画祭は誰でも出品できるものではなく、数千の応募作の中から各部門のディレクターに選ばれなければ出品できません。本作はフランス映画批評家連盟の推薦を受けました。また、マルセイユ国際映画祭で観客賞受賞、カルタゴ映画祭で日本映画週間オープニングムービーに選出、グライムラマ14世猊下より推薦文をいただく等の榮譽に浴しました。

フランスでは全国160館での公開が決定し、全国紙『リベラシオン』の取材を受け、特集記事が掲載されました。カンヌ国際映画祭には学校関係者が生徒と共に来場し、教育的な意義を以て本作を視聴いただく等、大反響を頂戴しました。続く国内での公開では、「仏教の教えを描いた映画というより、これは仏教の実践者を描いた映画だ。そこが素晴らしい」「映画で描かれる感情や思いに、宗教者ではない自分も共感できた事に驚いている。お坊さんが身近な存在だったのだと実感した」等の感想が寄せられました。会場には神主さんや若いクリスチャンのご夫婦も来場される等、世代や宗教を超えて様々な方にご覧いただきました。

本事業は第22期スローガン『禅を世界へ、そして未来へ』のもと、国境や世代を超えた禅の敷衍を目指して企画

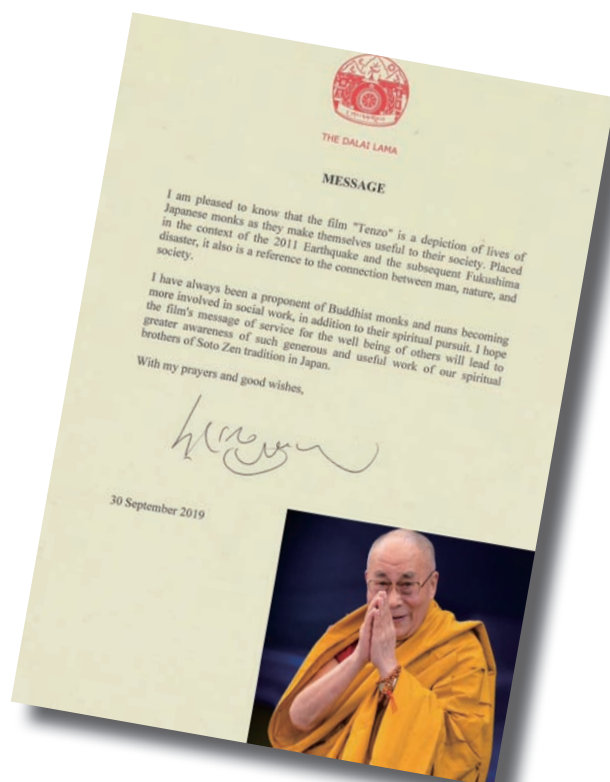
されたものです。カンヌ国際映画祭出品は海外の人々の目に禅や日本の青年僧侶の取り組みがどう映るかという反応を逆輸入することを目的としていました。実際に世界で様々な声を頂戴し、日本でも多くの世代の様々な方にご注目いただき、青年僧侶の可能性を大いに広げる事業となりました。



・試写会の様子(山梨)



・カンヌ国際映画祭会場



コロナ禍に オンライン技術で事業を展開



令

和元年末より、世界中で新型コロナウイルスの感染が拡大し、日本でも令和2年2月頃から様々な影響が現れ始めました。未知のウイルスへの対処は困難を極め、日本でも度重なる緊急事態宣言が発令され、外出自粛の期間には都市から人影が消えました。感染拡大と縮小を繰り返しながら、前代未聞の事態は約4年間続きます。この期間は、全曹青では第23期中盤から第24期の終了までにあたります。

令和2年4月。第23期後半に差し掛かるこの時期、日本では初となる緊急事態宣言が発令され、多くの方が自宅でオンラインツールを活用し生活することとなりました。この状況に対応するため、全曹青でも様々な取り組みが始まりました。

新オンラインコンテンツの創出

最初期には、新型コロナウイルス終息を祈願したオンライン法要動画を制作しました。会員それぞれが自坊で撮影した動画を繋ぎ合わせ一つの大きな法要としました。また同時期には自宅で行える写経や坐禅の作法を伝える動画を制作し、ダウンロード資料を合わせて配布しました。こちらは多言語コンテンツとし、特に坐禅作法にはブラジルの有志によるポルトガル語翻訳も

寄せられ、距離や言葉を越えた繋がりが生まれた取り組みとなりました。

第23・24期はYouTube動画を積極的に制作し、いずも曹洞宗青年会と共に制作した『ASMR精進料理』シリーズをはじめ、各委員会企画の動画も多数公開しました。それまで対面事業を主軸としていた全曹青にとって、コロナ禍における対面活動の制限は大きな問題ではありました。しかし各委員会アイデアを持ち寄り、社会状況の浮き沈みに負けない意欲的な活動を持続しました。

リモートツールによるリアルタイムの繋がり

コロナ禍では現地に集まってくる行事や会議を行うことは不可能となりました。その様な中でもオンラインツールを活用して会議を行い、初となるオンライン研修会も開催しました。第23期基幹事業であった過疎問題への取り組みとして、一般社団法人「お寺の未来」の井出悦郎氏を講師にお迎えし、全5回の研修会を実施しました。研修は講義を聞くだけでなく、動画配信にはない利点である相互のコミュニケーションを交えながら進めました。これまで開催地への参加が基本であった研修会において、遠方にながら継続参加できる本格的な研修会となりました。



・大本山總持寺開創700年慶讃法要を「ZENSOUSEI ONLINE FESTA」で配信

そしてこの遠方と繋がる取り組みは、以降もさらなる発展を遂げていきます。国内外の方を対象としたオンライン坐禅会も定期開催し、期をまたいで継続されました。また、毎年開催していた東日本大震災慰霊・復興祈願法要もライブ配信で開催し、遠方から多数の加盟曹青会や青年僧侶がオンラインで参加しました。さらに続く第24期には、大本山總持寺開創700年奉讃事業として、全曹青の歴史上初となるオンラインでの禅文化学林が開催されました。

「ZENSOUSEI ONLINE FESTA」と題されたこちらの事業では、大本山總持寺祖院での法要中継を主軸としながら、全国各地の加盟曹青会制作の動画を配信しました。法要中継では大本山總持寺江川辰三禪師御代理 石附周行禪師（当時、大本山總持寺副貫首）による「御両尊報恩諷經」と、山田第24期会長が焼香師を務めた「御両尊猷湯諷經」をライブ配信しました。動画配信では、まるで大本山總持寺祖院に様々なブースが集まるかのように各曹青会のコンテンツが持ち寄られ、オンライン上で全国の青年僧侶の協働が実現しました。

第23・24期では、このように様々なオンライン事業が大きく発展しました。これには、全曹青の積み重ねた50

年という歳月が影響を与えています。コロナ禍当時は会議もすべてオンラインで行いましたが、対面会議からスムーズな移行が成されたのは、すでに会内のペーパーレス化が進んでいたことも大きな要因です。また動画公開やライブ配信を活用できたことも、すでに全曹青公式YouTubeチャンネルが開設されていたことが大きな助けとなりました。50年という歳月で常に最新最善の取り組みを模索し続けてきたことが、コロナ禍という未曾有の事態に対し、大きなアドバンテージとなったのです。



- ・新型コロナ退散祈願オンライン法要
- ・山形曹洞宗青年会制作『修証義を味わうカレンダー』紹介動画
- ・『おうちで写経』
- ・『ASMR 精進料理』撮影風景

全曹青の国際交流事業

日本仏教の国際化を牽引した50年間の活動史

全 曹青の国際事業は第1期「韓国・仏教文化交流使節団派遣」より始まり、以降も様々な活動を展開してきました。近代においてはWFBY世界仏教徒青年連盟や全日本仏教青年会とも深く連携しています。

国際研修では、これまでに韓国・中国や東南アジア諸国、アメリカなどを訪れ、仏跡を参拝し現地の法要等を経験しました。両大本山や曹洞宗宗務庁にもご協力を賜り、全曹青の国際研修は大きく広がりを見せました。また同じく力を入れ継続してきたのが、第3期のカンボジア難民救済活動をはじめとする国際ボランティア事業です。カンボジア難民救済活動では歳末托鉢・街頭募金を実施し、実際に現地難民キャンプを訪問し、医薬品や子ども達にお菓子などを配布しました。この事業で曹洞宗ボランティア会（現シャンティ国際ボランティア会）と初めて協働しました。

充実した国際活動へと繋がる大きな起因は、第2期での全日仏書記念結集と共催された世界仏教徒青年会議への



参加でした。曹洞宗檀信徒会館で開催されたこの行事は、戦後の日本にとって世界の青年仏教徒が一堂に会する画期的な出来事で、全曹青からも多くの会員が参加しました。この時より全日仏青がWFBYへの加入を果たし、宗派の垣根を超えて仏教青年会の国際化が加速していきました。

その後、神野第7期会長や宮寺第16期会長、村山博雅師（現全曹青顧問）も全日仏青の理事長を務め、やがて全曹青第19期の頃には全日仏青の委員会組織編制が変わり、加盟団体ごとに全日仏青の各委員会を運営することとなりました。この時より全日仏青国際委員会を全曹青が担当し、WFBY日本センターとしての役割を担い、日本の仏教青年会の国際化を牽引していくこととなりました。

WFBYの基幹事業の一つである国際仏教徒青年交換プログラム（IBYE）にも積極的に参加し、今日まで500人以上と仏教を通じた深い国際交流を実施しました。また特に第22期には、倉島隆行全曹青会長が全日仏青

理事長を兼任し、世界仏教徒青年会議を10年ぶりの日本大会として成し遂げました。翌日には大本山總持寺で全日仏青全国大会と禅文化学林を併催し、映画『典座—TENZO—』試写会や精進料理の提供、仏教音楽祭などを通して曹洞禅を世界へと発信しました。同時に世界の仏教会がSDGsに積極的に取り組むことを東京宣言として世界に発表しました。またこの大会の役員総会で、全曹青より村山顧問がWFBY会長に就任。日本人としてはもちろん大乘仏教圏でも会長就任は史上初のことでした。そしてWFBY人事の多くを全曹青出向者が務め今日に至ります。

全曹青は創立期より、世界へ目を向けて青年僧侶の国際意識を育む研修を継続し、海外へも教化活動や国際ボランティアを実践してきました。半世紀という時間をかけて仏教や禅を基に各国との国際交流を継続し、言葉や文化の垣根を超えた全曹青国際活動の形が作られました。

全曹青50年の 国際活動史



第1期
韓国仏教文化交流使節団派遣
新制全日本仏教青年会加盟



第2期
インド仏跡参拝団派遣
「世界仏教徒青年会議」日本大会参加、WFBYへ加盟(曹洞宗檀信徒会館)
国際仏教文化交流(タイ・インドネシア)

第3期
カンボジア難民支援開始(義援金・現地支援)
大本山總持寺乙川瑾映禪師参拝団随員 天童寺落慶法要報恩拝登

第5期
第7回禪文化学林「天童山参拝と桂林の水墨画の世界めぐり」

第6期
大本山永平寺丹羽廉芳禪師随員
スリランカ大統領官邸訪問・坐禅堂建立地鎮祭参加(第9回禪文化学林)



第7期
「宝慶寺開山寂円禪師里帰り訪中団」参加
大本山永平寺丹羽廉芳禪師随員
スリランカ パラマ・ダンマ・チューティアピリヴェナ寺院 坐禅堂落慶式参加
ネパール・タイ研修開催(禪文化学林併催) 名誉団長・植山大典宗務総長

第9期
ロサンゼルス、サンフランシスコ 禪センターを訪問
北アメリカ国際布教総監部総監 山下顕光老師講演(第11回禪文化学林)

第11期
第12回禪文化学林「カンボジアに学ぶ仏教と開発」(山口・長野)
招待 カンボジア開発僧



第14期
アフガニスタン難民支援寄付
韓国曹溪宗体験安居研修(全曹青後援)

第15期
ミャンマー難民キャンプ訪問(SVA絵本事業に協力)

第16期
上座部仏教の坐禅法講習会開催(東京)
チベット仏教講習会開催(東京)



第17期
全日本仏教会 財団創立50周年事業参加
「WFBY世界仏教徒青年会議」日本大会参加

第19期
「WFBY世界仏教徒青年会議」参加(韓国)
「WFBY40周年記念式典」参加(台湾)
国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」参加(福島)

第20期
国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」(福島)
「全国徒弟研修会 with 国際子ども禅のつどい」開催(大本山總持寺)
中央研修会 プラムヴィレッジの高僧30人を招聘

第21期
ネパール地震災害支援活動
国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」参加(宮城)

第22期
WFBY世界仏教徒青年会議日本大会参加(大本山總持寺)第33回禪文化学林併催



第23期
マレーシア仏教青年会国際交流
タイ・バンコク禅研修 現地坐禅指導

第24期
国際仏教徒青年交換プログラム「IBYE」参加(オンライン)
『英語で親しむ梅花流』YouTube動画制作
研修会「ウクライナ現地報告会」開催(東京)
WFBY創立50周年記念「世界平和祈願法要」随喜(神奈川)
「WFBY50周年記念式典」参加(タイ)

2023

- 中央研修会「社会の価値に寄り添った布教～大衆教化の接点を求めて～」
- 国際オンライン坐禅会「ONLINE ZAZEN IN ENGLISH」継続
- 曹洞宗福島県青年会主催「ふくしま禅フェス 楽しい寺子屋」出展(福島)
- 「つるみ夢ひろば in 總持寺」出展
- SNS連載『日常に溶け込む、禅』連載開始
- 創立50周年記念 両大本山報恩拝登 大本山總持寺(禅文化学林)
- タイ仏教青年会主催「アユタヤ参禅研修会」参加
- 創立50周年記念 第1回「禅喫茶RYUREI」(石川)
- 太祖瑩山紹瑾禅師七百回大遠忌特別企画「世界禅Challenge」参加
- 韓国・曹溪宗僧侶交流会(京都)
- オンライン研修会「悩めるお坊さん～人間のセクシャリティについて～」
- 創立50周年記念 災害復興支援活動東海管区研修会(愛知)
- 創立50周年記念 災害復興支援活動九州管区研修会(熊本)
- 「ヨガ×坐禅～108回太陽礼拝～」(東京)
- シャンティ国際ボランティア会主催「カンボジアスタディツアー」参加
- 「味来食堂～僧食を学ぼう～」(年度内1回開催)



2024

- 能登半島地震復興支援活動
- 阪神・淡路大震災慰霊法要随喜
- オンライン研修会「寺院のための情報発信支援講座～Canvaで伝わるデザインを学ぼう～」(全2回)
- 創立50周年記念 オンライン坐禅会「穏坐」スタート(毎月末、日曜開催)
- オンライン研修会「僧侶の『国際活動』とは～これからのグローバル社会を生きる僧侶のために～」
- 東日本大震災慰霊・復興祈願法要
- YouTube動画『佐世保施設食法要』制作
- YouTube動画『祈祷太鼓の叩き方』制作
- 創立50周年記念 災害復興支援活動関東管区研修会(神奈川)
- 「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜
- 創立50周年記念式典・記念シンポジウム・記念講演
- オンライン研修会「悩めるお坊さん～災害と支援活動に向き合う第一歩～」
- 創立50周年記念 災害復興支援活動中国管区研修会(広島)
- 創立50周年記念 災害復興支援活動北信越管区研修会(石川)
- 創立50周年記念 第2回「禅喫茶RYUREI」(広島)
- 創立50周年記念 災害復興支援活動東北管区研修会(宮城)
- 創立50周年記念 災害復興支援活動北海道管区研修会
- 創立50周年記念 「自然に親しむZEN ASOBI」(京都)
- 創立50周年記念 第3回「禅喫茶RYUREI」(宮城)
- 日韓オンライン交流会「KOREA-JAPAN ZEN CLUB」(毎月1回継続)
- YouTube動画『般若心経／共に唱える』制作
- 創立50周年記念 両大本山報恩拝登 大本山永平寺(禅文化学林)
- オンライン交流会「世界の寺院から～ブラジル編～」
- YouTube動画『五観の偈～禅のこころでいただきます～』制作
- 「一年のおわりに～太陽礼拝108回と坐禅と精進料理と～」(東京)
- 「味来食堂～僧食を学ぼう～」(年度内4回開催)



2025

- オンライン研修会「寺院のための情報発信支援講座～SNSでお寺の魅力を伝えるスマホカメラ講座～」(全2回)
- 創立50周年記念 第4回「禅喫茶RYUREI」(愛知)
- 創立50周年記念 第5回「禅喫茶RYUREI」(大阪)
- 創立50周年記念 災害復興支援活動近畿管区研修会(京都)
- 箸匙セット『掬斎～KISSAI～』頒布
- 「仏法興隆花まつり千僧法要」随喜

YouTube動画『般若心経／共に唱える』制作
チャンネル開設当初から読経動画に多くの反響を頂戴していることをうけ、動画を通してお仏壇で一緒に勤めできるスマホ縦画面動画を制作した。

日韓オンライン交流会「KOREA-JAPAN ZEN CLUB」
韓国曹溪宗国際伝法団と協働し、日韓の僧侶や一般参加も含めたオンライン交流会を継続。お互いの活動や状況等の情報交換、参加者一同での坐禅を実施した。

能登半島地震復興支援活動
令和6年元旦の発災直後より活動開始。現地情報を集約し各加盟書青会へ随時共有し、支援活動のコーディネートを中心として、継続した現地活動も展開した。

「世界禅Challenge」
太祖瑩山紹瑾禅師七百回大遠忌に際し、大本山總持寺主催の「世界禅Challenge」に参加、全国の修行道場に、「一筆箋写経用紙」の写経ブースを出展した。

【第25期】
会長・田ノ口太悟老師
福岡県／長覚寺

全曹青創立 **50** 周年記念事業

（ 半世紀にわたり受け継がれた想い、
全国の力を結び合わせ、さらに未来へ ）



全曹青創立 50 周年のために描かれた本作は、全国より青年僧侶の力が結集し、大きな力となって躍動する様子をストロークで表しています。そして、躍動の中心に大衆教化の接点を求め寄り添う穏やかな心を、静寂の円として描いています。
題／ ZENSOUSEI 作／ YUH TAKUNO



禪文化学林併催

両大本山報恩拝登

令和5年11月29日 大本山總持寺
令和6年11月21日 大本山永平寺

青年僧侶としてはもちろん、青年会を卒会された諸先輩方にとっても、両大本山は背筋を正し初心に戻る特別な存在です。創立50周年の節目の拝登である当事業では、現在も法灯が途切れず青年会活動ができることへの報恩感謝とともに、未来に向けてのさらなる活動を誓いました。

法要

両 大本山において田ノ口会長が導師を務め、「全曹青創立50周年報恩諷經」を勤めました。さらに近年の世界的な情勢に鑑み、全曹青が歩んできた50年間で世界中で相次ぐ自然災害や戦争の惨事に見舞われた人々への供養と、世界平和への願いを込めた法要を行いました。

大本山總持寺では大祖堂において、全曹青名誉総裁であり当会第2期会長をお務めになられた石附周行紫雲臺猊下に「世界平和大祈禱諷經」を御親修賜りました。法要は大本山總持寺における大般若会法式に則り、祈禱太鼓と

もに200人以上の読經が堂内に響きました。そして大本山永平寺では法堂において、田ノ口会長導師による「世界平和大施食諷經」を修行しました。両班と大間内をはじめ法堂一杯に会員が随喜し、声を合わせた饒誦によって厳肅な法要となりました。

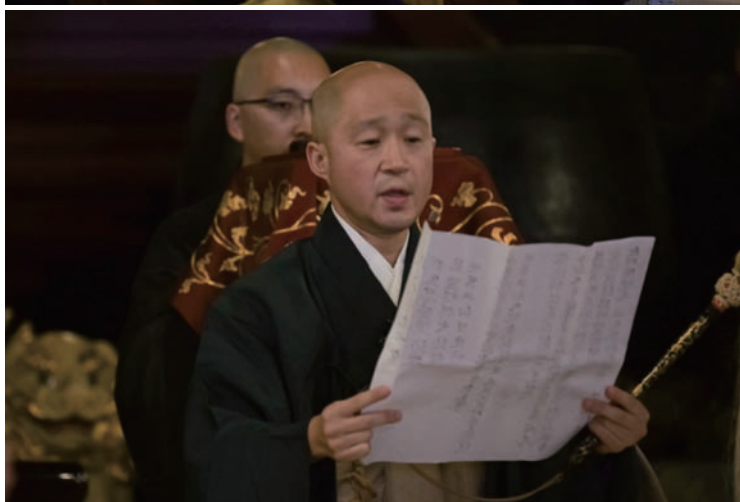
各法要には全国の青年僧侶をはじめ、全曹青歴代会長・副会長・事務局長、WFBY 村山博雅会長（全曹青顧問）と全日仏青 新井順證理事長をはじめ各団体役員の皆様にもご臨席いただきました。国や宗派の垣根を超えて共に世界平和を願う機会となりました。



創立50周年記念対談講演

大

本山總持寺では法要に先駆け、瑞応殿でSVA（シャンティ国際ボランティア会）と共催による創立50周年記念対談講演「『大衆教化の接点』を考える」が開催されました。講演には、SVAアドバイザーの大菅俊幸氏と東京大学名誉教授である島蘭進氏が登壇されました。



全曹青は今から50年前、全国各地の青年僧侶が集まり『大衆教化の接点を求めて』を標榜し創立しました。当時の想いとともに受け継がれてきた活動を、全曹青創立にご尽力なされ、SVAで活躍された故・有馬実成老師の生涯や仏教の教えになぞらえながらお話しされました。参加青年僧侶にとつて、活動を見直す大きな刺激になる講演会となりました。

全曹青は今から50年前、全国各地の青年僧侶が集まり『大衆教化の接点を求めて』を標榜し創立しました。当時の想いととともに受け継がれてきた活動を、全曹青創立にご尽力なされ、SVAで活躍された故・有馬実成老師の生涯や仏教の教えになぞらえながらお話しされました。参加青年僧侶にとつて、活動を見直す大きな刺激になる講演会となりました。

僧堂内単 坐禅一炷

大本山永平寺では、僧堂内単で坐禅一炷という貴重な機会を頂戴しました。僧堂は普段は安居者しか立ち入ることができません。今回は大本山永平寺元安居者にとつては懐かしくも身の引き締まる思いで坐り、他僧堂安居者にとつては新鮮でまさに法悦の体験となりました。当日は多数の参加者により、

り、ほぼすべて二重単となりました。50年の歴史の節目であるこの日、全国より世代や所属を超えて同じ「全曹青」として一堂に相集い坐禅一炷を共に経た一体感は、まさに全曹青結集の感動でした。会員一同、これからの未来へ共に歩む決意を新たにしました。

自然に親しむ
ZEN ASOBI
自然の中で学んで
泊まって
禅アソビ!

禅のつどい

「自然に親しむZEN ASOBI」

全曹青創立には、昭和30年頃から始まった「禅のつどい」運動が大きな機縁となっています。創立50周年を迎えたことを記念し、全曹青の原点に立ち返るとともに、現代の在り方で開催する様々な「禅のつどい」を展開しました。

当 事業は、自然の中で行う坐禅や精進料理、レクリエーション等を通じて、禅の魅力と教えを楽しく学び、僧侶を身近に感じていただくことを目的に企画しました。会場は京都府立「るり溪少年自然の家」をお借りし、10月19日から20日の1泊2日の日程としました。参加者は2歳から60歳代と幅広く、親子だけではなく子どもでの参加もありました。スタッフは全

曹青と加盟曹青会員、一般ボランティアも参加し、全国各地より総勢100人での開催となりました。

1日目は雨の影響もあり、運動遊びやモノづくりは館内で実施。精進料理作りは、火おこしから食事まで野外炊飯場で行いました。全員で五観の偈を唱え、食事を通して食材の命を頂戴することの大切さを学びました。夜には『KENSUSEI ZEN CUSHION』を使用し、モノづくりで制作した竹灯籠と蓮キヤンドルを囲んでの坐禅。法話も聞いていただき、静寂と幻想的な空気の中で身心を調えました。

2日目は雨も上がり、6時半に起床し朝の坐禅と勤行、お粥を食べた後に



全員で作務。その後、大ホールで様々な体験ブースを自由に回るレクリエーションと、木々

や溪谷を臨みながら山道を歩く謎解きクイズラリーを行いました。体験ブースは達磨絵付けや写経・写仏、お寺にある様々な物品に触れていただく仏教体験等、どのブースも順番待ちとなるほど好評でした。クイズラリーは参加者同士でグループを作り、和気あいあいと禅や自然にまつわるクイズを解きながらゴールをめざしました。

締めくくりのお坊さんカフェでは、お抹茶等とお菓子を味わいながら、クイズラリーの答え合わせと僧侶への質問タイムを行いました。2日間で参加者同士もとても仲良くなり、笑いが絶えない和やかな雰囲気の中、すべての日程を終えることができました。

開催後には、参加者から「お坊さんを身近に感じた」「友達がたくさんできた!」「また開催してほしい」等の感想が寄せられました。お寺を飛び出して開催した当事業だからこそ、青年僧侶や一般スタッフはもちろん、参加者とも同じ目線で一丸となることができました。自然の中で同じ時間を共有し、現代における『大衆教化の接点を求めて』を体現する「禅のつどい」となりました。



・謎解きクイズラリー



・夜の坐禅



・精進料理づくり



禅

喫茶「RYUREI」は禅と喫茶を組み合わせた現地開催型の企画であり、期を通して展開しました。平日夜にお寺では無く街のカフェなどのスペースを会場とし、坐禅と喫茶、法話を行う事業でした。

喫茶の時間にはその会場店舗のスイーツを提供し、僧侶がその場で点てた抹茶を一服差し上げます。一会場あたりの定員を少人数（10人前後）としたことで、僧侶が一方的に話すだけではなく参加者のお話にも耳を傾け、近い距離感でリラックスして過ごしていただける雰囲気も生まれました。

令和5年11月の石川県開催を皮切りに、広島県・宮城県・愛知県・大阪府と全国各地で開催しましたが、ありがたいことに全会場で満

禅のつづい 禅喫茶「RYUREI」



・カフェでの坐禅（金沢会場）

員御礼でした。本事業は、日々の生活によって疲れ気味になっていく心を洗い流す「心のデトックス」になればと考え、企画運営を進めました。そして実際に開催してみると、参加者は時間が経つにつれて和やかな表情となり、帰り際に笑顔で「楽しかったです」と声をかけてくださる方も沢山いらっしゃいました。そのような様子を見て、この企画の意義を見出せたのではないかと感じ、我々にとっても学びの場となりました。



オ

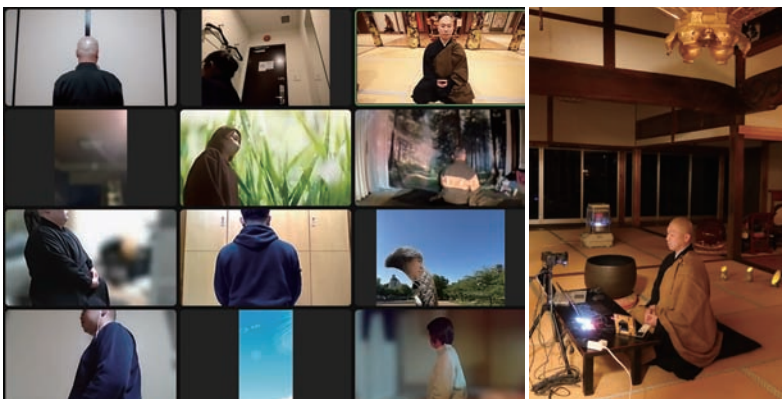
ンライン坐禅会「穩坐」は、令和6年2月より毎月1回開催しました。「ブルーマンデー」という言葉があるように、月曜日

が近づくことと仕事や学校のことを考え、心が沈みがちになってしまいうことがあります。そこで日曜夜に開催し、坐禅や法話を通して、週の初めに向けて心を静める一助にしていきました。

初開催時から20人を超える参加者が集まり、これまで延べ300人以上参加いただきました。

毎回リピーターの方だけでなく、初参加の方もいらっしゃるため、坐禅作法は都度丁寧に指導しました。また坐禅の最後は必ず法話の時間とし、毎回違ったお話をさせていただきました。季節や天気、話者の心境に応じて様々な法話を

禅のつづい オンライン坐禅会「穩坐」



・パソコンから目を離し面壁で坐った

伝え、参加者からは「今の自分に響くお話でした」「ぐっすり眠れそうです」などの感想を頂戴しました。

当事業ではオンラインの特性を活かし、互いに離れた地で生活しながら、日常の中で同じ坐禅の時間を共有しました。人との繋がりと心の支え合いの場となる「穩坐」に、坐禅会における未来の可能性を発見する事業となりました。

災害復興支援活動全国研修会 多発する災害への即応力を醸成 誰もが支援に向かえる全曹青を



全

国曹洞宗青年会50周年記念事業
として、全国9管区で災害復興
支援活動全国研修会を開催しました。

東海管区(愛知県永澤寺)
九州管区(熊本県大慈寺)
関東管区(神奈川県大林寺)
中国管区(広島県泉龍寺)
北信越管区(石川県輪島市門前町)
東北管区(宮城県見松寺)
北海道管区(北海道定光寺)
四国管区(愛媛県興雲寺)
近畿管区(京都府興聖寺)

本研修は青年僧侶や寺族を対象とし、被災地で活動されている講師をお招きし、災害復興支援において必要になる道具や心構えなどの講義を行いました。併せて、第20期より現在全国15ヶ所に配備しているストックヤードを活用し、災害時青年僧侶が行う機会の多い炊き出し研修を行いました。災害復興支援活動に対する不安を払拭し、実際に災害が起きた際、率先して支援活動に向かうことのできる人を増やすことを目的としました。

各管区の研修では、午前中に各地の地元の食材を使って実際に調理の様子を実演し、炊き出しの注意点や災害支援の経験をもとに講義を行いました。調理終了後は参加者でバック詰め

して、実際の炊き出ししながらに昼食をとりました。午後には講師による災害復興支援心得講義、質疑応答を交えたパネルディスカッション、災害復興支援部より全曹青の活動説明とストックヤードや災害MLの説明を行いました。

また、令和6年1月1日に能登半島地震が発災した北信越管区での研修では、午前中は炊き出しで作った約450食を公民館や避難所に配布しました。午後は座学講義の代わりに、大本山總持寺祖院の瓦礫撤去や清掃等の復興支援活動を行いました。支援活動終了後は、山門前で能登半島地震慰霊諷経を行いました。

近年、全国各地で災害が多発しています。全曹青は阪神・淡路大震災や東日本大震災へのボランティア活動をはじめ、災害復興支援に力を注いできました。しかし経験が乏しい場合には、活動に対して消極的になってしまうこともあります。各管区での本研修を通して、正しい知識を身に着けて活動することの重要性とともに、全国の誰もが支援活動に向かうことができる下地を築くことができました。



創立50周年記念式典・記念シンポジウム 歴代会長が全曹青への期待を語る 半世紀の想いを結んだ「未来への結集」

令 和6年5月23・24日に、全曹青創立50周年記念式典・記念シンポジウム・記念講演が曹洞宗檀信徒会館で挙行されました。半世紀の節目となる今期、第25期のスローガンである『結集・想いを結び合わせ、未来へ』のもと、全曹青に関わった方々のまさに結集の場となりました。

当日記念式典には、200人以上にも及ぶ現役会員と歴代役員、各方面で全曹青をお支えくださった関係各位がご参加くださいました。記念式典では大本山總持寺貫首・石附周行禪師をはじめ、東京別院副監院・宗清志老師による大本山永平寺貫首・南澤道人禪師からのご祝辞の代読、曹洞宗宗務総長・服部秀世老師よりお祝いのお言葉を頂戴しました。また、田ノ口第25期会長導師による仏祖諷経、全曹青物故者慰霊諷経、元日に発災した能登半島地震への慰霊黙祷と復興支援活動報告が行われました。久保沙里菜アナウンサーの司会進行のもと会場内は非常に厳肅

な雰囲気です。記念式典として相応しいものとなりました。

引き続き同会場では、始めに50周年記念事業の紹介の後、「未来への結集」と題した記念シンポジウムを開催しました。歴代会長にご登壇いただき、当時の全曹青を取り巻く時代背景や、活動中のエピソード、さらには今後を担う青年僧侶に対しての期待をお話しいただき、未来へと繋がる有意義なシンポジウムとなりました。

散会ののちは場所を第一ホテル東京に移し祝賀会が行われ、清興では秋田県曹洞宗青年会所属の渡邊英心師、曹洞宗北海道第三宗務所青年会所属の加藤熙章師の演奏により、会場が一体となり、とても和やかなお祝いの場となりました。

翌24日、曹洞宗檀信徒会館において戦場カメラマン渡部陽一氏に「レンズからの宗教／戦場の死生観」というテーマのもとご講演いただきました。世界各地で戦争が勃発し、現代は不安

定な時代といえます。戦場での生と死、宗教が鍵となって現在でも続いている悲しい争いについて、壮絶な経験を踏まえお話しいただきました。

記念式典全体を通し、半世紀の間携わった多くの方々の想いの積み重なりこそが現在の全曹青であることが実感されました。また創立理念の『大衆教化の接点を求めて』は今後も指針としてあり続け、そこそが時代に合わせた「自由で創造的な活動」を生み出していくことを確信しました。

・記念講演 渡部陽一氏
・シンポジウム登壇の歴代会長方
・記念式典 仏祖諷経



50周年記念事業実行委員長 森井宗淳



当記念誌『LOG』の発行において、多くの皆様のご協力を賜りましたこと、誠にありがとうございます。特に両大本山貫首猊下、宗務総長老師、歴代会長老師、歴代関係諸老師の皆様には、ご多忙にも関わらずご寄稿と取材をご快諾いただきましたこと、また多くの関係企業様にはご協賛を賜りましたこと、この場をお借りして衷心より感謝申し上げます。

半世紀の特別な節目としての記念事業を計画するにあたり、全曹青が50年前、どのように始動し、現代まで如何に歩みを進めてきたのか、そこに携わられた歴代諸先輩方の想いを学ぶことから始めました。過去の広報誌や総会資料などの膨大な記録を読み漁り、実際に記念事業を通じて歴代諸先輩方の当時のお話を伺うにつれ、今の青年会活動は当たり前に行っているのではなく、長く大きな軌跡の上で活動させてもらっていたことに改めて気づかされました。それと同時に、もっと早く事業やここに込められた想いを知っていれば、8年前の初出向時からまた違った目線を持って全力で活動ができたのではないかと、勿体なさを感じました。

だからこそ、現在・未来の青年僧侶が、青年会活動を始める際に真っ先にこれまでの歴史を共有でき、活動のヒントと勇気を得て、その「今」に全力で突き進むことができる指針となる、そういう記念誌を残したいと思いました。

歴代諸先輩方から当時の熱い想いが込められた生のお声を伺い、その熱量をできるだけ伝えられるよう心掛け、今期の全曹青が丸となり取材・編集し、この度の創立50周年記念誌『LOG』を発行するまでに至りました。

この記念誌『LOG』が、『大衆教化の接点を求めて』歩み始める未来の全国青年僧侶の、新たな一歩への「指針」となることを切に念じ、発行に対しての謝辞とさせていただきます。

編集後記

本記念誌の『LOG』というタイトルには、記録という意味の他に「Log Growth（成長の連鎖）」という意味も込めました。今日まで進み続けた会の記録であることと同時に、青年僧侶の挑戦と活動への想いが未来へ繋がることを願ったタイトルです。そのため、誌面内容は過去の情報をまとめたただけのものではなく、随所に過去と現在の関係性を読み取る記述があります。

全曹青の活動には2年1期の区切りがありますが、誌面を読んでいただけでは分かるように、各期の取り組みは完全に独立したものではありません。どの時代においても『大衆教化の接点を求めて』というテーマが根底にあり、想いや活動は次の期へと受け継がれています。そして過去の出来事やその時の想いが連鎖するように、新たな発想や事業が生まれています。

今日に届いたこの活動の連なりは、半世紀の節目を経てさらに次世代へと引き継がれます。過去から未来へと繋がる一コマに発行した本誌が、今後の青年僧侶にとって受け継がれた想いの再確認と新たな活動を考えるヒントとなることを願って、編集後記とします。

Log

全国曹洞宗青年会創立50周年記念誌『LOG』 御協賛各位



ご寺院用荘厳仏具、記念品の販売、修復、修繕、適切な商品をお値打ち価格でご提供いたします。

有限会社 加藤仏具葬儀社 合同会社 ヤマカ

代表取締役 加藤 勝弘

〒028-0523 岩手県遠野市中央通り 11-17

TEL: 0198-62-3723 FAX: 0198-62-3702 mail: yamaka@katobutsugu.jp

ご葬儀の無料相談・事前相談を承っております

株式会社 セレモニー・サービス

セレモニーホール
風の里



ご葬儀 直葬 家族葬 ご法事 寝台車

※当社は広島県内全域のお葬式をお手伝いさせていただいております。

セレモニーホール風の里

ご相談無料電話・年中無休/24時間受付 ☎ 0120-931-924

■本社 〒722-1122 広島県世羅郡世羅町大字小世良80番地1 TEL(0847)25-5655 FAX(0847)25-5677

故人のご冥福をお祈りいたします

各種法要
承ります

奥出雲会館

(株)内田工務店葬祭部

仁多郡奥出雲町三成 1618-1 Tel.0854-54-1949

特製金襴・本場米沢織 / スーパールク・シルキーワン製造元

両大本山御用達

筭井筒屋

蓮から化繊まで自社開発にて行う品質管理

山形本店 [9時-18時] ☎ 0120-122-894 山形県山形市本町2-4-10

横浜鶴見店 [10時-17時] ☎ 0120-401-565 神奈川県横浜市鶴見区寺谷1-7-1 1F

九州営業所 佐賀県鳥栖市本島町615-1

<https://idutsuya.co.jp>

株式会社 錦匠堂

〒719-3503 岡山県新見市大佐小阪部 2446-2
TEL: 0120-41-5608

桐製品製作 加藤木工

〒508-0001 TEL 0573-66-6722
FAX
岐阜県中津川市中津川 1307 の6



〒088-1116 TEL: 0153-52-3358
北海道厚岸郡厚岸町松葉 3-7 FAX: 0153-52-7759

京法衣事業協同組合委員
全国曹洞宗法衣同業会会員
京都曹洞宗専門店連盟加盟店
株式会社 諸井春之助法衣仏具商店

〒604-0812 京都市中京区高倉通二条上ル
TEL (075) 231-4884番
FAX (075) 231-7348番
フリーダイヤル 0120-31-4885番



京佛具・法衣
株式会社 小野

〒604-8093 京都市中京区富小路通御池下る松下町 135 番地 3
コスモシティ御池富小路 1 階
TEL: 075-221-0118 FAX: 075-221-0166 MAIL: info@onohou.com
<http://onohou.com/>

全国曹洞宗法衣同業会会員

毎月全国書店・電子書籍にて絶賛発売中!!



遊びある、ホンネ。 雑誌のお問い合わせ: 販売部 03-3518-6861
SHINYUSHA **360LiFE**

各寺院御用達

- 全日本宗教用具協同組合加盟店
- 曹洞宗全国梅花指定店
- 周南市仏教団支部指定店



全国ぶつだん館 おぶつだん・お墓

翠心堂
すいしんどう

徳山店 山口県周南市五月町10番52号
☎(0834) 22-3111

下松店 山口県下松市東豊井新町1368 (下松駅前)
☎(0833) 41-7111

大本山御用達
曹洞宗専門・法衣全般・金襴類・雲水用具

株式会社 西浦法衣佛具店

〒910-0005 福井市大手2丁目22-39
TEL 0776-22-6374・FAX 0776-22-6425
振替口座 00930-8-86767
全国曹洞宗法衣同業会会員

ITで地域貢献を目指す

パソコン ネットワーク工事 PPC複合機 パソコン講習
プリンタ 事務所用什器備品 ホームページ作成 OA機器



株式会社村山事務器

〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字柳田28番地
TEL 0186-23-6310 FAX 0186-23-6505



山口営業所 TEL 083-902-1363
email: yamaguchi@sekishin.com

- 寺院荘厳具全般 製作及び修理
- 特注品の製作もお受けいたします
- 各種記念品、贈答品等 お受けいたします
- 在家用仏具、仏壇 豊富に取り揃えております

寺院荘厳具製作・修理、位牌、仏壇

 (株)お仏壇のはくもと

〒914-0814 福井県敦賀市木崎19-15-3
TEL.0770-22-0945
FAX.0770-22-2421
E-mail m-hashimoto@rm.rcn.ne.jp



寺院葬

きあら

〒400-0064
山梨県甲府市下飯田2丁目4番5号
TEL 055-222-9444
FAX 055-222-9445





ビーエス観光グループ

心をかたちに感動の旅 

お墓のこと!!
仏壇・仏具

地域に密着

1棟貸切の邸宅葬
さくら

(有) **リョウコ**

雲南市木次町里方511-7
TEL 0854-42-5134

雲南市大東町上佐世609-1
TEL 0854-47-7823

SMP 創文社印刷株式会社

印刷 + α

考えています!

〒420-0812 静岡市葵区古庄二丁目7番16号
TEL.054-265-0870・FAX.054-265-2180
<https://www.sobunsysa.co.jp/>

映画『二宮金次郎』

大好評!! 全国市町村にて絶賛上映中!!
上映のお申し込み募集中!

—お問合せ—
映画「二宮金次郎」製作委員会
〒150-0011 東京都渋谷区東1-11-3
電話: 03-3518-6345
担当: 武田

※上映につきましては、
自費上映のみ受付となります。
予めご了承下さい。

道徳専門の教科書会社
日科 233 日本教科書株式会社

監督: 五十嵐匠 出演: 合田雅吏 田中美里



仏壇・仏具・墓石製造直売 寺院用仏具・法衣御用達

 **株式会社 佛光堂**

本社 〒747-0035 山口県防府市栄町2丁目2-47
TEL0835-23-7755 FAX0835-23-8215
E-mail bukkodo@d4.dion.ne.jp <https://bukkodo.co.jp/>

本店営業部	萩支店	徳山総本店
ぶつだん館	美祢総本店	新南陽支店
本社工場支店	山陽小野田支店	下松支店
山口支店	宇部岐波支店	光支店

家族のきずなをつなぐお仏壇

合掌の心
まごころこめてご奉仕

仏壇・仏具・お宮・神具
寺院荘厳具・納骨堂設計施工

(株)善光堂

現代仏壇 (0154) 22-4067 (代表) 釧路市北大通り9丁目
特約店 位牌各種取扱・作成いたします クレジットご利用ください

お車での送迎をお申し付けください  善光堂ビル北側 駐車場完備



安らぎに…
心をこめて…



柏木葬祭

〒729-3431
広島県府中市上下町上下 852
TEL : 0847-62-3505
FAX : 0847-62-3968

両大本山御用達



株式会社 梅金商店

〒460-0011
名古屋市中区大須三丁目39番33号
(大須交差点東北側)
TEL(052)241-0901 (代表)
FAX(052)241-1904
<https://baikin.co.jp/>




拝む心で尊い品を…

うめたに

仏壇仏具・神社仏閣総合企画

■本店
〒819-0373 福岡市西区周船寺3-9-4
TEL(092)807-0500 FAX(092)807-0501

■川端店
〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1 1F (博多マリイン1F)
TEL(092)271-0456 FAX(092)271-0464

有限会社

板倉葬儀

.....

〒085-0833 北海道釧路市宮本2丁目 9-9
TEL : 0154-41-0777



御寺院様用お仏具
お仏壇・お仏具・墓石の
ご用命は浜屋へ

やすらぎの世界を創る



浜屋

■本社/姫路市南畝町2丁目31番地
TEL(079)288-2211代
イロイロ クヨー

0120-1616-94

浜屋御本尊 釈迦如来像
日本で唯一の伽藍の香木製
お問い合わせは
浜屋姫路本社フリーコールへ



株式会社

美濃角

曹洞宗専門 御法衣・御佛具
SINCE 1896

オンラインショップ『おてらのくらし-美の角商店』にて日用品を販売しております。

〒600-8475 京都市下京区油小路通綾小路下る風早町 564 セノータF号
TEL : 075-351-3406 ☎ : 0120-66-3406 FAX : 075-351-3493



OSUMI あなたの笑顔が見たいから。

おおすみ会館

〒753-0871 山口県山口市朝田 928-1
TEL : 0120-07-6060
HP : <https://sousai.osumi-group.jp/>



株式会社 長谷川法衣佛具店

本社 〒400-0031 山梨県甲府市丸ノ内3丁目33の13
電話055-222-8223

営業店舗 〒409-3864 山梨県中巨摩郡昭和町押越1132-3
電話055-275-9288 FAX055-269-6333

寺院用仏具・仏壇・墓石・製造販売



株式会社

放光

本社・工場 〒940-0825 新潟県長岡市高畑町 617



0120-174176

FAX 0258-32-7149

ホームページ

<http://hoko-butugu.com/>



公益財団法人 仏教伝道協会
BUKKYO DENDO KYOKAI

会長 木村清孝

理事長 沼田恵明

生きる力を、
お仏壇から。

仏壇・仏具（各宗寺院用仏具）宮・神具専門

株式会社

野村仏壇店



■岩見沢店

■札幌店仏壇館

■江別店

■縁 enishi 野村仏壇ギャラリー

■丸井今井札幌本店（仏壇・神仏具売場）

ホームページ：www.nomura-butsudan.jp

創立50周年記念誌『LOG』発行に際し
多大なるご協賛を賜り
衷心より御礼申し上げます

ZENSOUSEI

50th
Anniversary



